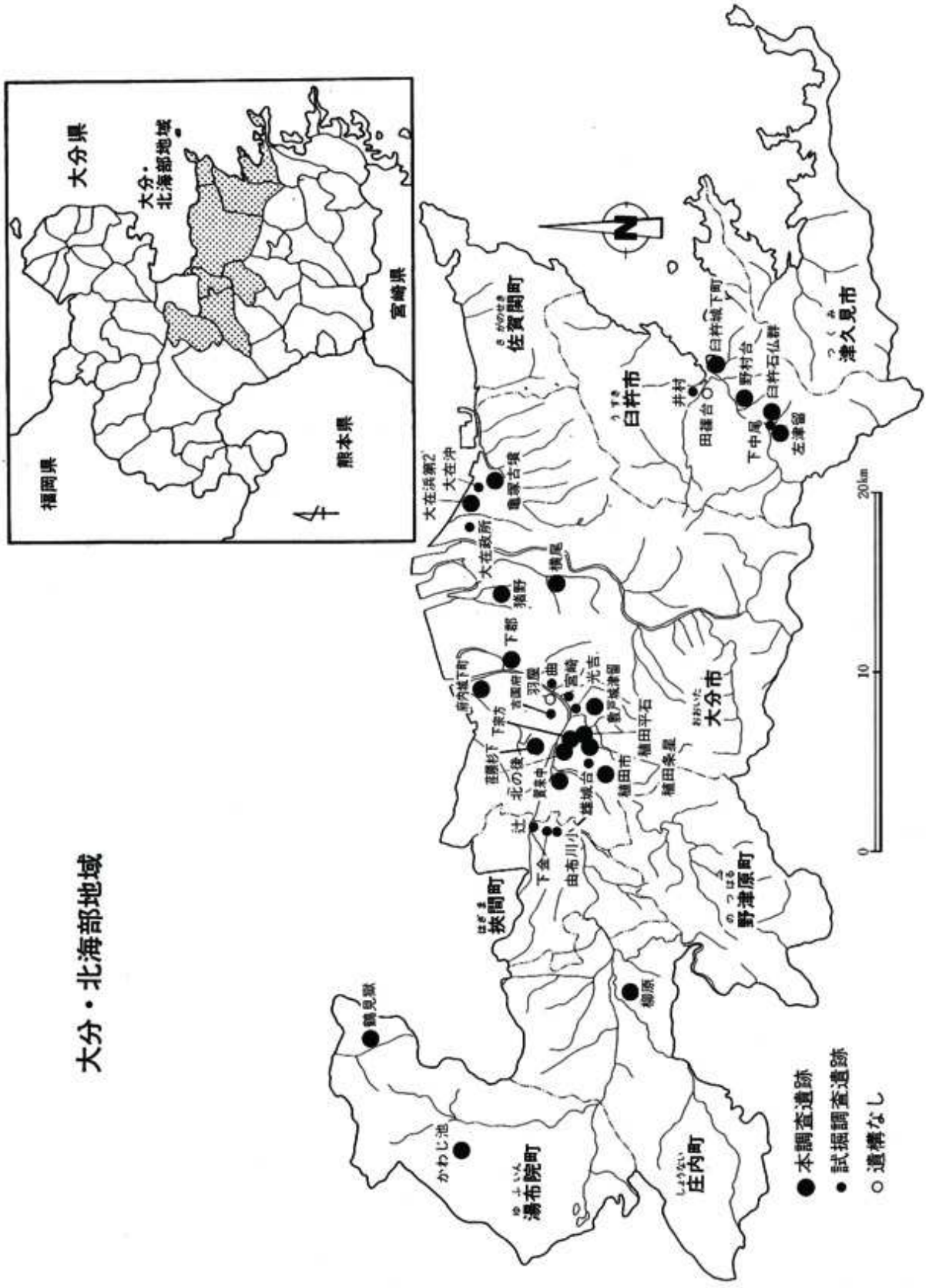

大分県
大分・北海部地域
福岡県
熊本県
宮崎県
佐賀関町
臼杵市
津久見市
大分市
挟間町
野津原町
湯布院町
庄内町
大在浜第2
大在沖
亀塚古墳
大在政所
猪野
猪尾
下郡
府内城下町
羽屋
曲
宮崎
光吉
鶴見獄
かわじ池
柳原
由布川小
下金
辻
北の津
賀来中
建城台
植田市
植田平石
植田条里
臼杵城下町
野村台
臼杵石仏群
左津留
下中尾
田篠台
井村
0
10
20km
● 本調査遺跡
• 試掘調査遺跡
○ 遺構なし

大分・北海部地域

84. 下宗方地区遺跡群（しもむなかたちく）

所在地 大分市大字上宗方～下宗方
調査原因 九州横断自動車道設
調査期間 930406～9403
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 14,500㎡
担当者 江田　豊
処　置 計画通り建設
台帳番号 322111（玉沢地区条里跡として周知）

位　置 大分川と七瀬川の合流する付近に形成された沖積地で現在は大規模な水田地帯である。

大きく稙田条里遺跡と呼ばれ条里遺構が広がる地域である。この付近には稙田市遺跡や稙田平石遺跡、雄城台遺跡といった弥生～古墳時代にかけての集落遺跡の広がるところでもある。

下宗方地区遺跡群位置図
（地形図「大分」使用）

概　要 調査は大字八幡田の大分県立職業訓練校の付近から順次行ない調査対象地の絞り込みを行なった。大半は七瀬川の氾濫原で遺構・遺物の顕著な出土は認められなかった。そのなかで字橋の本、字二反田、字山伏田、字六反田で遺構・遺物が認められた。

橋の本遺跡は旧河道が検出され、弥生時代の遺物が若干出土。二反田遺跡・山伏田遺跡では縄文時代晩期の包含層と弥生時代の旧河道、六反田遺跡では古墳時代の住居跡と溝が確認されている。（江田）

85. 北の後遺跡（きたうしろ）

所在地 大分市大字上宗方字北の後　**調査面積** 5,000㎡
調査原因 九州横断自動車道建設（大分～大分間）　**担当者** 染矢和徳
調査期間 940201～940331　**処置** 調査継続中
調査主体 大分県教育委員会　**台帳番号** 322111（玉沢地区条里跡として周知）

概要 調査区は大分市街地から南西に4㎞、雄城台の台地が大分川に落ちていく段丘上に位置している。土砂堆積状況は耕作土層（Ⅰ層）－灰色土層（Ⅱ層）－黒色弱粘質土層（Ⅲ層）－黒色土層（Ⅳ層）－褐色土層（Ⅴ層）の順である。Ⅲ層からは、12～13世紀代の磁器片を出土したが、遺構は確認されなかった。Ⅳ～Ⅴ層からは、弥生時代後期後葉の土器片を大量に伴う溝状遺構、6世紀後半の土師器、須恵器を伴うカマド付きの竪穴住居跡、6世紀末～7世紀初頭の遺物を伴う掘立柱建物跡等を確認した。今後遺構は台地沿いに拡大していくと考えられる。（染矢）

北の後遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

column ⑧

平成5年は、長雨、そして台風の当たり年であった。5月から10月までの6ケ月間の、現場（大分市内）での実動日数は15日、6日、8日、10日、11日、17日である。つまり6月から9月の4ケ月は、半分以上が雨、または、調査区にたまった水汲みのために、調査ができなかったのである。

この長雨の中でも、それに追い討ちをかけたのが、9月3日に大分地方を襲い、多くのガケ崩れ被害を出した台風13号であった。調査区の水没、土手の崩壊はまだしも、現場事務所が天井近くまで水に浸かる、という被害もでたのである。

水没した調査区

86. 荏隈杉下遺跡（えのくますぎした）

所在地 大分市大字荏隈字杉下
調査原因 九州横断自動車道設
調査期間 930406～931130
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 21,500㎡
担当者 西　哲弘・江田　豊
処　置 計画通り建設
台帳番号 新発見

位　置 大分平野の南西部、庄の原台地と大分川に挟まれた沖積地にある。この遺跡の北側丘陵部分には旧石器～古墳時代の遺跡である庄の原遺跡や尼ケ城遺跡や城南遺跡といった弥生時代の遺跡や蓬莱山古墳や田崎古墳群、丑殿古墳といった古墳も広がっている。

荏隈杉下遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

遺　構 縄文時代晩期の包含層からピットが数ケ所検出された。住居跡等の遺構とは考えにくい。弥生時代前期末から後期後半にかけての旧河道が2条確認された。おそらく台地を開析した谷から流れこんでいた川の名残と思われる。調査では、この河道内に矢板列が確認された。規模は長さ約3ｍで1列、それに伴う杭列が検出された。その他に奈良時代の溝が1条検出されている。

遺　物 縄文時代の包含層から晩期後半の突帯文土器が出土している。突帯には無刻目と刻目が供伴して出土している。これに伴い石鏃や石斧等が出土している。弥生時代の旧河道からは下城式土器や後期後半の甕・壺が出土している。奈良時代の溝からは、土師器の杯が2点出土している。

（江田）

87. 府内城三ノ丸遺跡（ふないじょうさんのまる）

所在地	大分市大手町3丁目1番1号	**調査面積**	45㎡
調査原因	モニュメント（記念碑）建設	**担当者**	吉田　寛
調査期間	930719～930803	**処　置**	調査後破壊
調査主体	大分県教育委員会	**台帳番号**	322041（府内城・城下町として周知）

位　置　府内城三ノ丸は江戸時代府内藩の武家屋敷で、現在の大分市街地とほぼ重複する。発掘調査地点は大分県庁舎前の広場で、モニュメント（記念碑）の建設が予定されている地点である。調査地点は、江戸時代後期に府内藩の家老や用人を務めた木戸孫九郎の武家屋敷が存在した地点に相当する。

遺　構　中世　土坑1
　　近世　土坑5　貝の集積1

遺　物　中世の土坑からはほぼ完形に復元される土師質土器土鍋1、坏2が出土。近世の土坑からは、陶磁器類、瓦等が出土した。肥前産の磁器碗の中には焼継を施すものがあり、内底部に朱描きで「入　孫九郎様」と書かれた焼継文字が認められるものも存在する。

まとめ　調査面積が狭いのにもかかわらず、発掘調査では多量の遺物が出土した。焼継文字が認められる磁器碗の存在によって、当該地点が木戸孫九郎の屋敷地であったことを考古学的に裏づけたことになる。さらに中世段階の遺物の出土によって、江戸時代の城下町形成以前に何らかの生活痕跡が存在していることが明らかとなった。　（吉田）

文献：吉田寛『府内城三ノ丸遺跡　－大分県共同庁舎前広場モニュメント建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』大分県教育委員会、1994年

府内城三ノ丸遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

調査区全景（拡張前）

ＳＫ４遺物出土状況

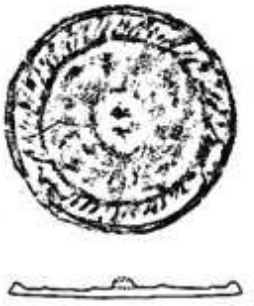
88. 植田条里遺跡（わさだじょうり）

所在地	大分市大字玉沢字四反田ほか	**調査面積**	6,700㎡
調査原因	道路建設	**担当者**	小柳和宏・綿貫俊一
調査期間	930412～931203	**処置**	調査後破壊
調査主体	大分県教育委員会	**台帳番号**	322111（玉沢地区条里跡として周知）

位置　大分川とその支流である七瀬川の合流点付近に開けた沖積地にあり、標高13m前後のほぼ平坦な地形をなしている。一帯は玉沢条里や植田条里と呼ばれる条里の痕跡が良好に残存している。

植田条里遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

遺構　幅約20mの道路幅のみの調査であったため、遺構の全体的な広がりを掴むことは不可能であったが、沖積地に長さ約600mのトレンチを設定したと考えた場合、ある程度の状況が見えてくる。即ち、弥生時代後期に性格不明の方形遺構が築かれるが、水田の痕跡は認められない。古墳時代前期になると、3条の溝で囲まれた環濠集落が微高地上に形成される。そして、古墳時代後期には、微高地上の一部を残して、かなりの面的なひろがりを持つ水田が出現する。しかし、条里地割りが形成されたと考えられる古代については全く状況が掴めなかった。


溝から出土した小型仿製鏡（S＝½）

遺物　環濠と考えられる溝から小型の仿製鏡（渦文鏡？）が出土している。また、古墳時代前期の環濠中に投機された一括資料は、当期の編年基準資料として活用されよう。

まとめ　弥生時代から古墳時代後期にかけての沖積地の利用（開発史）の変遷が、僅かの線ではあるが追えたことは重要である。さらに周辺の遺跡調査の成果とあわせ、従来考古的には全く不明であった大分の低地部における開発状況が、かなり具体的に描けるものと思われる。

（小柳）

89. 植田平石遺跡（わさだひらいし）

所在地 大分市大字玉沢字平石（たまざわ ひらいし）
調査原因 大分県保健環境部精神保健センター建設
調査期間 930726～931001
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 3,500㎡
担当者 染矢和徳
処置 計画通り建設
台帳番号 322111（玉沢地区条里跡として周知）

位置 大分川支流の七瀬川が形成する沖積地上に所在する。遺跡は植田条里跡内に在り周辺には深町遺跡、植田市遺跡等が存在する。

遺構 調査区西半分より竪穴住居跡1、掘立柱建物跡3、溝状遺構1を確認した。東半分からはプラントオパール分析により水田跡の可能性が高い土層を検出した。

遺物 住居跡からは4世紀前半の土器片、水田跡と考えられる土層からは6世紀後半の須恵器片を出土した。溝からは土器片をわずかに出土したが時期不明である。掘立柱建物からは遺物は出土しなかった。（染矢）

文献：『植田平石遺跡』大分県教育委員会、1993

植田平石遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

90. 植田市遺跡（P区）（わさだいち）

所在地 大分市大字市字垣の内
調査原因 道路建設
調査期間 930831～931006
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 450㎡
担当者 小柳・綿貫・吉田
処置 予定通り工事
台帳番号 322112

概要 道路部分の幅20m、長さ25m程を全面調査した。その結果、古墳時代の溝、中世～近世の掘立柱建物跡3軒、井戸、土坑などが出土した。植田市遺跡A区～L区の中世屋敷跡との直接的な関係はないと思われる。（小柳）

植田市遺跡（P区）位置図
（地形図「大分」使用）

91. 大在第2浜遺跡（おおざいだいにはま）

所在地 大分市大字大在字浜352
調査原因 区画整理
調査期間 930524～930723
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 1,000㎡
担当者 村上久和
処置 記録保存
台帳番号 新発見

位置 調査地点は大在浜付近に点在する古砂丘の最先端に位置する。この地点は昭和51年に調査した浜遺跡の西約100mの所で同一古砂丘中である。

遺構 遺跡における土層と遺物の関係は表土下約30cmの風化の著しい黒褐色砂質土層を間層に弥生土器および玉砂利大の小石を集積状態で検出した。弥生土器のほとんどに焼成後の穿孔が認められることから、葬送に関わる祭祀儀礼などに関係したものと考えられる。また小石は土壙墓・木棺墓などの上に撒いた可能性もあるが土壙墓等の遺構の痕跡は認められなかった。

遺物 出土遺物は弥生時代中期前半－中頃の壺・カメ・高杯・脚付鉢等である。特に高杯・脚付鉢の脚部接合技法に瀬戸内で多く見られる円盤充填が認められるのがその特徴である。

まとめ 本遺跡は、東国東郡武蔵町内田遺跡や同郡国東町重藤遺跡などとともに県下でも数少ない砂丘遺跡であるとともに、亀塚古墳に象徴されるような海部集団につらなる人々のものと見られる。

（村上）

大在第2浜遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

遺物出土状況

92. 猪野(いの)遺跡

所在地 大分市大字猪野字栗流
調査原因 マンション建設
調査期間 930531～930625
調査主体 大分市教育委員会
調査面積 約600㎡
担当者 讃岐和夫
処置 一部保存・記録保存
台帳番号 322153

位置 市街地より約5.5km南東方向、大野川の支流乙津川河口より約4kmの左岸に展開する標高40m前後を測る鶴崎丘陵上に位置している。この地域は、これまでの新産業都市建設の進展に伴う急激な人口増加と都市化により、宅地化が急速に進んでいる。

猪野遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

遺構 弥生時代中期後半～後期初頭の土壙群と柱穴群、および中・近世の溝状遺構

弥生時代
- 土壙
- 貯蔵穴　12基（円形）
- 土壙墓　4基（長方形）
- 土器蓋土壙墓　1基（円形）

中世
溝状遺構　1条
（幅4m、深さ1m断面逆台形を呈している。）

近世
溝状遺構　1条＋α（幅 1.5m、深さ 0.2m断面弧状を呈している。）

土器蓋土壙墓検出状況

遺物

弥生時代
- 鋤先状の口縁部を有する壺
- 下城式土器

（土器蓋土壙に使用されたものは、口縁部の外面を肥厚し、山形（八ノ字）に施文を行っている壺形土器）

中世
スリ鉢、白磁、青磁、土師器破片

近世
寛永通宝1点、染付、陶磁器類破片

（讃岐）

文献：『猪野遺跡　マンション建設に伴う発掘調査報告書』大分市教育委員会、1994

93. 賀来中学校遺跡

所在地 大分市大字賀来字脇
調査原因 区画整理事業
調査期間 9307～9308
調査主体 大分市教育委員会
調査面積 450㎡
担当者 池邉千太郎
処置 調査後破壊
台帳番号 322067

位置 大分川によって形成された標高15～20mの河岸段丘に遺跡は広がり、北側には賀来川が流れ、大分川と合流する。これまで、集落を囲む環濠が見られる他、壺棺墓等が発見されている。

賀来中学校遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

遺構 溝状遺構…5条　土壙…20基
井戸跡…2基　柱穴…多数

遺物 溝状遺構
1号溝（土師器坏・蓋・盤・椀・甕・鍋・短頸壺、緑釉陶器…8～9C）
2号溝（土師質土器小皿・坏、白磁碗・青磁碗・土錘等…13C）
8号溝（古式土師器壺・甕・高坏等）
井戸跡（明代の染付碗…16C）
土壙（土師器坏・蓋・椀、土師質土器坏、青白磁合子、青磁碗…12C後～13C前）
柱穴（緑釉陶器・越州窯系碗…9C）

完掘状況

まとめ 1号溝状遺構から8～9世紀の遺物が出土しており、国分寺や官道との関係が注目され、遺物の在り方からこれに関連した施設があったことが示唆される。さらに12世紀後半から13世紀前半は、この地に賀来氏の本拠地が置かれたと推定される時期と一致し、調査において土師質土器や輸入陶磁器が多く出土したことから注目されよう。（池邉）

94. 亀塚古墳（第1次）

所在地 大分市大字里字大塚
調査原因 史跡整備
調査期間 9307～9312
調査主体 大分市教育委員会
調査面積
担当者 讃岐和夫
処　置 保存・整備
台帳番号 322227

位　置 古墳は市街地より約12.2kmほど東に位置する丘陵上に所在する。古墳は標高43m前後の丘陵端面に造営されており、全長120mを越える前方後円形をなしている。古墳の前面には広大な別府湾が広がり国東半島や遠くは四国等を眺望することができる。

亀塚古墳位置図
（地形図「大分」使用）

遺　物 埴輪（円筒埴輪、朝顔形埴輪、楯形埴輪、家形埴輪）

まとめ 亀塚古墳の調査は、古墳の保存整備と周辺の史跡公園化にむけての基礎資料の収集を目的としておこなった。本年度の調査は第1次調査として、古墳の具体的な規模・墳丘状況の把握、付帯施設等の有無の確認に主眼をおき実施したが、その結果、墳丘の3段築成の状況をより明確にすることができた他、葺石の敷設の様態、各段に配置された円筒埴輪等の状況やテラスには玉砂利が敷かれていた事実など貴重な成果を得ることができた。

亀塚古墳造り出し部

さらに、特筆すべき調査成果としては西側くびれ部付近において発見された方壇状（9.5×8m、高さ70cm）の造り出し部をあげることができよう。新たな付帯施設の発見として重要である。

また、これまで実態が不明確であった小亀塚古墳についてもその全容を把握することができた。古墳は亀塚古墳の北側30mほどに位置し、全長35mを越える前方後円墳であることが明らかになった。

（讃岐）

文献：讃岐和夫『県指定史跡　亀塚古墳　保存整備事業　第1次発掘調査概報』大分市教育委員会、1994

95. 敷戸城津留遺跡（しきどじょうづる）

所 在 地　大分市大字鴛野字城津留
調査原因　宅地造成
調査期間　930802～930817
調査主体　大分市教育委員会
調査面積　約100㎡
担 当 者　塔鼻光司・坪根伸也
処　　置　調査後破壊
台帳番号　新発見

位　置　調査地は大分市大字鴛野字城津留1260番地１他にあたり、敷戸川の左岸、本宮山から北東に延びる丘陵上に位置する。

敷戸城津留遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

遺　構　調査の結果、断面がＶ字形を呈し、東側に開口する谷状の落ち込みを確認した（ＳＶ01）。この谷状遺構は、検出面から 0.8 m～ 2.8mの深さを有し、現存する谷部に接続する。土層観察の結果、埋土はすべて東側に向けて堆積し、この地点が谷最深部にあたることから流れ込みによる堆積と考えられる。

ＳＶ０１堆積状況

遺　物　遺物は各層中から輸入陶磁器、土師器坏・小皿、鍋、瓦器椀・小皿、常滑焼甕、東播系須恵器鉢・甕、亀山焼甕、砥石、土錘、滑石製品等が出土した。その中でも輸入陶磁器の数は多く、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、白磁の他、青白磁や中国陶器などもみられる。これらの陶磁器は太宰府区分のＤ・Ｅ・Ｆ期にあたるもので、年代は大きく12世紀中頃～後半と13世紀中頃～14世紀前半に分けられる。

まとめ　今回の調査地点では谷最深部において、多量の輸入陶磁器をはじめとする中世遺物が廃棄されていた。今回の陶磁器の出土傾向により年代幅を推定するに留まったが今後は共伴する土師器の分類を行い、年代を検討する必要があろう。当地周辺は敷戸氏の本貫地と考えられており、多量の出土遺物との関連が注目される。　（塔鼻・坪根）

96. 下郡（しもごおり）遺跡群（B区C－12・13地点）

所在地 大分市大字下郡
調査原因 区画整理
調査期間 9312
調査主体 大分市教育委員会
調査面積 約310㎡
担当者 坪根伸也
処置 計画通り工事
台帳番号 322137

位置 今回の調査地点は大分川の東側に展開する鶴崎丘陵の裾部に位置し、下郡遺跡群の東限にあたる。近接地からは過去の調査において青銅製のヤリガンナや弥生時代の家畜動物遺体などが検出されている。

下郡遺跡群位置図
（地形図「大分」使用）

遺構 調査区の北側部分において弥生時代前期末～中期の所産となる貯蔵穴群、柱穴等を検出した。南側部分は水田耕作に伴うと考えられる近世以降の溝状遺構が構築されており、該期の遺構は欠失する。貯蔵穴は上部を削平され基底部しか遺存しておらず、必ずしも良好な状態とはいえないが、これらの貯蔵穴の数基には底面直上に土器を内包するものがあり、帰属年代を推定する手掛かりとなる。また、調査区の中央付近で検出した円形を呈する貯蔵穴内では土器とともに多量の炭化材が確認されている。

貯蔵穴遺物出土状況

遺物 下城式甕形土器・壺形土器が貯蔵穴内から出土した他、弥生時代前期に比定される削り出し突帯を有する壺形土器などが出土した。また、これらの遺物に混じり縄文時代後期初頭に比定される中津式・コウゴー松式等の破片も認められる。

まとめ 弥生時代集落の範囲把握に新たなデータを追加することができた。本拠点周辺で頻出する縄文遺物の帰属遺構の探索が今後のひとつの課題となろう。（坪根）

文献：讃岐和夫『下郡遺跡群概報(1)～(3)』大分市教育委員会、1990～1993

97. 下郡（しもごおり）遺跡群（F区1～n－5・6地点）

所在地	大分市大字下郡	**調査面積**	約3,100㎡
調査原因	区画整理	**担当者**	坪根伸也
調査期間	930501～930812	**処置**	計画通り工事
調査主体	大分市教育委員会	**台帳番号**	322137

位置　今回の調査地点は大分川の河口付近の右岸に展開する下郡遺跡群のほぼ中央に位置する。

下郡遺跡群位置図
（地形図「大分」使用）

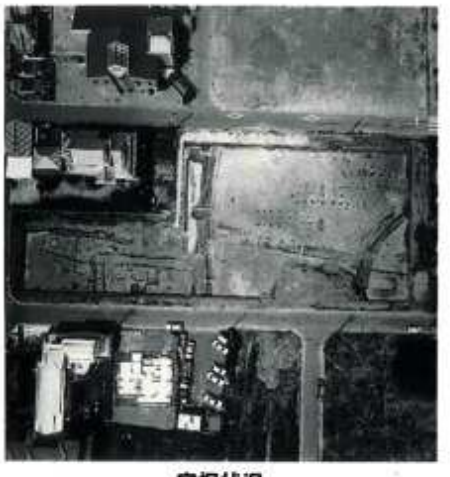
遺構・遺物　検出遺構には溝状遺構・土坑・柱穴・井戸跡・総柱倉庫跡・掘立柱建物跡があり、各遺構中から遺物の出土が認められる。出土遺物・遺構を整理すると、当地域にはおおよそ以下に示す3時期の遺跡形成が考えられる。

Ⅰ期　奈良時代（8世紀後半）

Ⅱ期　中世

Ⅲ期　近世（17世紀後半～18世紀前半）

Ⅰ期の所産となる遺構には掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構（2号溝）が相当する。建物配置から2時期以上の建物群の存在が想定される。


完掘状況

Ⅱ期のものとしては、井戸跡・溝状遺構（1号溝）が該当する。井戸跡は遺物の出土が少なく厳密な時期の特定は行えない。1号溝については出土遺物からほぼ15世紀代の所産年代が考えられる。

Ⅲ期には溝状遺構（4・6・7・8・9号溝）が相当する。6・7・8・9号溝は埋土状況からほぼ同時期の所産とみてよい。出土遺物の様相の上では4号溝が他のものに若干先行するようである。7・8号溝は完結する大小の溝の組み合わせにより構成されており、水路等の利用目的は想定しがたい。これらの溝状遺構の溝総体としての性格は不明であるが、当地の字名「堀向」との関連が注目される。（坪根）

98. 下郡（しもごおり）遺跡群（H区q・r－20地点）

所在地 大分市大字下郡
調査原因 区画整理
調査期間 940119～940223
調査主体 大分市教育委員会
調査面積 約400㎡
担当者 坪根伸也
処置 計画通り工事
台帳番号 322137

位置 今回の調査地点は、下郡遺跡群内でも南西地域に相当する。周辺地域にはすでに数回の調査歴があり、弥生時代中期の集落址、弥生時代後期終末に比定される環濠集落、平安時代の井戸跡等が検出されている。

下郡遺跡群位置図
（地形図「大分」使用）

遺構・遺物 溝状遺構（近世） 1
井戸跡（近世） 2
井戸跡（中世末） 1
井戸跡（古代） 1
不定形土坑（中世？） 1
柱穴 多数

以上の内、古代に比定される井戸跡は、井戸水溜部に半截した丸太の刳り貫き材を埋置しており、井戸埋土中に黒色土器・土師器坏・緑釉陶器片・瓦片などを内包する。これらの資料はほぼ10世紀前半代に比定されるもので、井戸の所産時期を示唆するばかりでなく、当該期の土器相を考える上でも貴重な資料となろう。他に縄文後期に比定される西平式土器破片、縄文晩期の精製浅鉢、12世紀～13世紀を中心とする青磁・白磁片、16世紀代の所産となる土師器などが出土している。

完掘状況

（坪根）

99. 下郡（しもごおり）遺跡群（H区ｒ・ｓ－22・23地点）

所在地　大分市大字下郡
調査原因　区画整理
調査期間　9402～9405
調査主体　大分市教育委員会
調査面積　約1,200㎡
担当者　坪根伸也
処置　計画通り工事
台帳番号　322137

位置　本遺跡は大分川が形成する第二段丘上に展開する集落遺跡である。

昭和63年・平成元年に実施した近接地域の調査所見により弥生時代後半～古墳時代前期にわたる集落跡の存在が予見されていた地点に相当する。

下郡遺跡群位置図
（地形図「大分」使用）

遺構・遺物　調査の結果、弥生時代後期終末を中心とする竪穴住居跡・土坑・壺棺、中世～近世におよぶ掘立柱建物跡・溝状遺構等を検出した。

検出した住居跡の総数は27軒にのぼり、そのうち19軒について掘り下げを実施している。住居跡には隅丸方形・方形の平面プランをもつものがあり、いずれも遺存状況がきわめて良好である。検出住居の時間的な存続幅は、出土土器から弥生時代後期後半～古墳時代初頭に求められる。

完掘状況

土坑は弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものが主体を占める。

各土坑の具体的な性格は現段階では不明であるが、これらの中で布留式段階の遺物を内包する土坑の床面には皿状に焼土が堆積し、土坑の使用目的を考える上で参考となろう。また、壺棺墓は肩部上部を打ち欠いた壺形土器を2個体合わせたものと単棺に土器破片による蓋をした2基を検出した。両者とも弥生時代終末の所産となるものだが、両者は切りあっている。（坪根）

100. 下郡（しもごおり）遺跡群（Ⅰ区Ｐ－11地点）

所在地　大分市大字下郡
調査原因　区画整理
調査期間　931115～931119
調査主体　大分市教育委員会
調査面積　約70㎡
担当者　坪根伸也
処　置　計画通り工事
台帳番号　322137

位　置　大分平野西部を貫流する大分川が形成した河口近くの右岸に展開する自然堤防に立地する下郡遺跡群内のほぼ中央に相当する。

遺　構　溝状遺構２、土坑２、柱穴１を検出した。１号溝は従来から存在の判明していた弥生時代後期の環濠の一部である。今回の調査結果により、すでに判明していた環濠の展開状況に新たなデータを追加することができた。溝断面はＶ字形をなし、検出面からの深さは 1.1ｍを測る。埋土は次の４層により構成される。１層－淡茶褐色土層　２層－淡茶褐色砂質土層　３層－黄茶褐色土層　４層－黄茶褐色土＋黄褐色土。これらのうち、２・３層に夥しい土器の堆積がみられ、原形を保ったままのものも数多く存在する。

２号溝は１号溝の西側に検出された溝状遺構で、切り合い関係から１号溝に後出するものであることは明らかである。溝深度も0.25ｍと浅く、出土遺物が少ないため具体的な時期特定は行えない。

遺　物　１号溝内から多量の土器が出土している。出土土器はおおよそ弥生時代後期後葉～終末に比定されるものである。

まとめ　今回の溝データの追加により判明した環濠集落のおおよその推定範囲は、少なくとも直径65ｍの環濠に囲まれた約3,000㎡にのぼると考えられる。正確な範囲確認のための延長部分の調査が今後の課題となろう。　（坪根）

下郡遺跡群位置図
（地形図「大分」使用）

１号溝

文献：讃岐和夫・坪根伸也『下郡遺跡群概報(2)』大分市教育委員会、1992

101. 近世府内城下跡遺跡（若竹公園）

所在地	大分市府内町二丁目	**調査面積**	約500㎡
調査原因	公園改修	**担当者**	塔鼻光司
調査期間	9307	**処置**	一部保存
調査主体	大分市教育委員会	**台帳番号**	322041（府内城・城下町として周知）

位置　大分市街中心部府内町に位置する。府内城は北に別府湾を望む典型的な平城で、城主竹中重利の時、城下町建設に着手した。三の丸（侍町）の外側に東西10町、南北9町の範囲を約40の町に長方形に区画した町割りが行われ、中世の町から町屋や寺院を移した。当遺跡は三の丸を囲む中堀上に位置する。

近世府内城下跡遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

遺構　中堀は最大21間（42m）あり、今回の調査では床面のみで石垣等は確認されなかった。

遺物　近世陶磁器、曲物・下駄

まとめ　出土遺物の中には、当時の庶民の生活を窺い知ることの出来る物が数多く含まれている。また、近年大分市内でも大分県共同庁舎建設に伴う調査や、大分合同新聞社社屋建設に伴う調査など近世遺跡に関心が集まっているが、市街地での調査は制約を受ける事が多く、今後の調査は十分な検討が必要であろう。（塔鼻）

調査状況

102. 近世府内城下跡遺跡（大分合同新聞社社屋建設予定地）

所在地	大分市府内町三丁目	**調査面積**	約600㎡
調査原因	ビル建設	**担当者**	讃岐・塔鼻・坪根・池邊
調査期間	9304～9305	**処置**	計画通り工事
調査主体	大分市教育委員会	**台帳番号**	322041（府内城・城下町として周知）

位置　大分市街地の中心部、県合同庁舎と大分市役所本庁舎とのほぼ中間地点に位置する。

近世府内城下跡遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

遺構　遺構は既存のビル建物基礎などの攪乱穴等により随所に分断され、遺構検出にあたり困難を極めたが、調査の結果、総計6時期（鎌倉時代～現代）にわたる遺構・遺物を確認することができた。検出遺構には溝状遺構・井戸跡・ゴミ捨穴等があり、埋土内に遺物を内包する。

遺物　［鎌倉時代］

輸入陶磁器片・糸切底を有する土師器坏

［16世紀末～17世紀初頭］

土師器坏・古唐津系陶器片・中国輸入染付片

［17世紀後半］

肥前系陶磁器片・漆塗り木椀・箸・竹箕・ゲタ・曲物

［18世紀前半］

すり鉢片・土師器坏・肥前系陶磁器

［18世紀後半～19世紀初頭］肥前系陶磁器・瓦

［明治時代～現代］

ゴミ捨て穴を中心に薬ビン・瓦片・コンクリート片等

完掘状況

まとめ　本調査地点は江戸時代に屋敷地として使用されていた場所であり、今回検出された溝状遺構のいくつかは屋敷地割りに関連するものと推定される。主要遺構の大部分が主軸方位に規則性を有することからなんらかの規制のもとで構築されたと考えられ、各遺構の年代比定の妥当性が確認されれば、府内城下における地割り規制の初源期を考える上での参考となろう。

（塔鼻）

103. 横尾（よこお）遺跡群（B－4・5・6地点）

所在地　大分市大字横尾
調査原因　区画整理事業
調査期間　9312～9403
調査主体　大分市教育委員会
調査面積　約1,400㎡
担当者　池邊千太郎
処置　調査後破壊
台帳番号　322160（東中尾遺跡として周知）

位置　横尾区画整理事業内の西側に位置し、調査対象は東西に100m、南北に30mの範囲内にある。

横尾遺跡群位置図
（地形図「大分」使用）

遺構　B－4地点　土壙…20基　溝…1条
B－5地点　掘立柱建物…8棟
土壙…8基　溝…3条
B－6地点　掘立柱建物…12棟
土壙…数十基　柵列…10条
土壙墓…5基（2基は桶）
溝…2条　集石遺構

遺物　B－4地点　土壙（土師質土器坏…12C）
B－5地点
1号溝（備前産の摺鉢…17C）
2号溝（陶器の甕、磁器の小碗・仏飯器…18～19C中）
3号溝（磁器の小坏・碗…19C中以降）
B－6地点　土壙（土師器坏・甕…9C、土師質土器…13～14C、土師質土器坏・火容れ…16～18C）
溝（備前摺鉢…16～17C）

完掘状況

まとめ　東西に延びる近世の溝とこれに伴う掘立柱建物群が見られ、区画性が認められた。さらに水溜土壙、墓・集石など生活遺構や非生活遺構が見られる他、9世紀代の土壙墓も確認された。（池邊）

104. 横尾（よこお）遺跡群（B－2、S地点）

所在地 大分市大字横尾
調査原因 区画整理事業
調査期間 9309～9310
調査主体 大分市教育委員会
調査面積 約400㎡
担当者 池邉千太郎
処置 調査後破壊
台帳番号 322160（東中尾遺跡として周知）

位置 大分市大字横尾に位置する。B－2、S地点は区画街路南北線と東西線とが接するところにあたる。

横尾遺跡群位置図
（地形図「大分」使用）

遺構 掘立柱建物　5間×1間…1棟
2間×1間…2棟
1間×1間…1棟
桁・梁行不明…3棟
溝状遺構…2条
柵列…1条
集石土壙…1基
土壙墓…1基

遺物 集石土壙（磁器、土錘…17C前後）
土壙墓（瓦器碗1点）
溝状遺構（備前の摺鉢、甕、火容…17C）

まとめ 17世紀代を中心とする掘立柱建物が見られ、建物配置や切り合いから4時期に変遷する。建物は溝に伴うものや倉庫と思われる2間×1間と1間×1間が見られた。直径1.1mの土壙墓から出土した瓦器碗は豊後高田に位置する船塚横穴墓[1]から出土した二次的再利用時のものと類似する。集石を伴う6×3.8mの規模の浅い土壙は火葬場としての性格が考えられるが、今後の課題である。（池邉）

完掘状況

註(1) 玉永光洋・吉武学『船塚遺跡』大分県教育委員会、1985

105. 横尾（よこお）遺跡群（B－12・13地点）

所在地　大分市大字横尾
調査原因　区画整理事業
調査期間　9305～9307
調査主体　大分市教育委員会
調査面積　約760㎡
担当者　池邊千太郎
処　置　調査後破壊
台帳番号　322160（東中尾遺跡として周知）

位　置　大分市大字横尾に位置する。この地点は、区画整理事業による2号公園予定地にあたる。

遺　構　掘立柱建物　2間×1間…7棟
3間×1間…4棟
4間×2間…2棟
柵列…4条
土壙…多数　溝状遺構…4条
柱穴…多数　集石遺構

遺　物　溝状遺構…1号溝（内黒土器椀）
2号溝（火容、摺鉢…16C）
3号溝（染付小皿…18C末）
4号溝（陶磁器…近世）
柱穴…奈良時代土師器坏
中世
～近世までの土師器坏・摺鉢
土壙…石臼

まとめ　建物規模・主軸方向・一間寸法から4時期に渡って14棟建物の形成が見られた。建物の時期は溝（11C・16C・18C末）や柱穴（8C）の時期と重なると想定される。（池邊）

横尾遺跡群位置図
（地形図「大分」使用）

発掘状況

106. 雄城台遺跡（おぎのだい）

所在地 大分市大字玉沢
調査原因 セミナーハウス建設
調査期間 940324～940325
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 約660㎡
担当者 友岡信彦
処　置 平成6年度本調査
台帳番号 322113

概　要 雄城台遺跡は、これまでに8次に互る調査が行われ、弥生時代前期末～古墳時代初頭の竪穴住居跡、溝、貯蔵穴等が確認されている。

今回の調査区は、台地東側の緩斜面で、果樹園として使用されており、台地頂上部との比較差は約3ｍである。また、南側は谷へと傾斜下降していく。

調査は、重機を使用しての遺構確認作業を行った。この結果、遺構の残りは本来の地形がかなり削平をうけあまり良くないが、弥生時代中期～後期と思われる竪穴住居跡4軒と土坑、柱穴を確認した。このため、次年度あらためて本調査を行う予定である。（友岡）

雄城台遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

107. 大在政所遺跡（おおざいまどころ）

所在地 大分市大字大在字政所
調査原因 区画整理
調査期間 931106～931108
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 約50㎡
担当者 村上久和
処　置 予定通り工事
台帳番号 新発見

位　置 調査地点は現在の大在駅の北側のメイン道路である。旧状は大在浜に点在する古砂丘の南側に形成された後背湿地帯の一部である。

調　査 試掘調査で黒色泥炭層を含んだ溝が発見され、その層中に弥生土器小片が発見されたのでこの層のプラント・オパール調査を実施した。結果水田の水路である可能性が高い。今後この周辺部の調査は浜遺跡の被葬者の生産活動を解明するのに重要な地点である。

（村上）

大在政所遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

108. 大在沖遺跡（おおざいおき）

所在地 大分市大字大在字沖103
調査原因 区画整理
調査期間 930918
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 50㎡
担当者 村上久和
処置 予定通り工事実施
台帳番号 新発見

位置 調査地点は大在浜に点在する古砂丘の一部で古砂丘の先端に位置する。この付近に土器の散布地があったので試掘調査をおこなった。この地点には最近まで養豚場があったらしく砂丘層が撹乱されていたので遺構遺物は発見されなかった。しかしながら周辺で多量の土器の散布地があるので周知遺跡とし、開発がある場合は事前の調査が必要である。

（村上）

大在沖遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

109. 古国府遺跡（ふるごう）

所在地 大分市大字羽屋
調査原因 街路建設
調査期間 9306～9403
調査主体 大分市教育委員会
調査面積 8,000㎡
担当者 塔鼻光司
処置 工事実施
台帳番号 322070

概要 本調査は、大分市都市計画道路古国府木ノ上線建設に伴う発掘調査で、今回3次目である。当遺跡一帯は大分平野で最大の条里遺構が存在している所であり、また、古国府・羽屋地区は上野台地と共に豊後国府跡推定地として注目されている所である。1次・2次調査では古墳時代の住居跡、溝状遺構、8世紀代と思われる掘立柱建物などが検出されており、本調査でもその関連遺構を想定していたが、僅かに柱穴が確認されたのみであった。

今回の調査では調査区の制限などから確認できなかったが、今後、水田等生産遺構の存在などを総合的に検討する必要があろう。

（塔鼻）

古国府遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

110. 光吉遺跡（みつよし）

所 在 地 大分市大字光吉
調査原因 高速道路建設
調査期間 9306～9403
調査主体 大分市教育委員会
調査面積 53,100㎡
担 当 者 高橋　徹・塔鼻光司
処　　置 工事実施
台帳番号 新発見

概　要 本調査は、九州横断自動車道および一般国道210号他都市計画道路併設区間に伴う発掘調査である。大分川右岸、支流である七瀬川と寒田川に挟まれた平野部に位置する。

トレンチ調査の結果、耕作土中から近世陶磁器の小破片が極少量出土するだけで重要な遺構・遺物は検出されなかった。

（高橋・塔鼻）

光吉遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

111. 宮崎遺跡（みやざき）

所 在 地 大分市大字宮崎
調査原因 高速道路建設
調査期間 9306～9403
調査主体 大分市教育委員会
調査面積 9,500㎡
担 当 者 高橋　徹・塔鼻光司
処　　置 工事実施
台帳番号 新発見

概　要 本調査は、九州横断自動車道および一般国道210号他都市計画道路併設区間に伴う発掘調査である。大分川右岸、支流である寒田川と一の瀬川の合流部の狭隘な平野部に位置する。トレンチ調査の結果、耕作土中から近世陶磁器の小破片が極少量出土するだけで重要な遺構・遺物は検出されなかった。

（高橋・塔鼻）

宮崎遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

112. 曲（まがり）遺跡

所在地 大分市大字曲
調査原因 高速道路建設
調査期間 9306～9403
調査主体 大分市教育委員会

調査面積 35,500㎡
担当者 高橋　徹・塔鼻光司
処　置 平成6年度調査
台帳番号 新発見

概　要 本調査は、九州横断自動車道および一般国道 210号他都市計画道路併設区間に伴う発掘調査である。大分川右岸、支流である一の瀬川の東側に広がる平野部に位置する。当遺跡の北側台地には、守岡遺跡が存在する。試掘調査の結果、弥生から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。特に、中世の遺構は溝状遺構と掘立柱建物が検出されており、守岡遺跡との関連が注目される。（高橋・塔鼻）

曲遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

113. 羽屋（はや）地区

所在地 大分市大字羽屋
調査原因 国道拡幅
調査期間 930720
調査主体 大分県教育委員会

調査面積 400㎡
担当者 玉永光洋
処　置 予定通り工事
台帳番号 ―

概　要 国道210号（羽屋工区）の拡幅工事に伴い、トレンチを設定し重機による掘り下げを行った。その結果、泥炭層が厚く堆積しており、遺構・遺物は出土しなかった。（玉永）

羽屋地区位置図
（地形図「大分」使用）

114. 臼杵城下町遺跡（原山台地区）

所在地 臼杵市大字二王座字神ノ木原268番1
調査原因 無線基地局建設
調査期間 931206～940110
調査主体 臼杵市教育委員会
調査面積 140㎡
担当者 菊田　徹・神田高士
処　置 調査後破壊
台帳番号 323066

位　置 臼杵市の南に位置する鎮南山から北側へと延びる舌状台地上にある。中世末から近世にかけて台地の北半分が武家屋敷地として整備されている。

臼杵城下町遺跡位置図
（地形図「臼杵」使用）

遺　構 近世土坑1
近世小溝1
近代建物跡1

遺　物 近世陶磁器、近世瓦等

まとめ 江戸期の絵図によれば、調査区一体は畠地となっており、それを裏付けるように、近世の武家屋敷に関連する遺構は検出されなかった。近世陶磁器が大量に出土した近世土坑は廃棄坑として掘られたものとおもわれる。（菊田）

115. 臼杵石仏群地域遺跡（B地区）

所在地	臼杵市大字深田字園田	**調査面積**	1,300㎡
調査原因	河川改修	**担当者**	菊田　徹・神田高士
調査期間	931128～940315	**処　置**	調査後破壊
調査主体	臼杵市教育委員会	**台帳番号**	323061

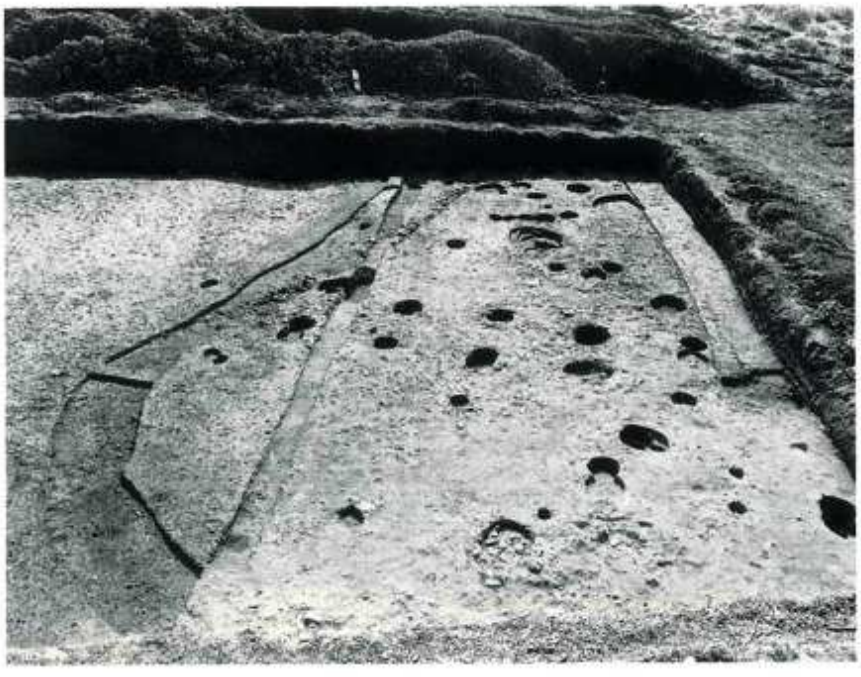
位　置　臼杵川中流域にある深田地区の東、西、南の三方を台地と山にかこまれた湿地帯の中に所在する。

遺　構　掘立柱建物群とそれをとり囲む周溝状遺構は91年度に実施した調査で検出された周溝に接続するものである。

遺　物　14世紀代を中心とする土師質土器、中国製陶磁器、中世瓦等が出土。

まとめ　91年度に隣接地で検出された周溝の続きが確認されたことにより、中世寺院「満月寺」を構成する建物群１区画分の規模がおおよそ判明する成果があった。　（菊田）

臼杵石仏群地域遺跡位置図
（地形図「臼杵」使用）



116. 野村台遺跡（原地区第Ⅱ次）

所在地 臼杵市野田字原
調査原因 道路建設
調査期間 930803～931012
調査主体 臼杵市教育委員会
調査面積 240㎡
担当者 神田高士
処置 調査後破壊
台帳番号 323054

位置 臼杵川中流域の鎮南山系から北へと延びる野村台地上に所在する遺跡である。原地区は台地の北縁部に位置している。

遺構 15世紀代と思われる掘立柱建物遺構のほか、近世墓坑、近代の貯蔵穴等。

遺物 15世紀代を中心とした土師質土器、中国製陶磁器片等。

まとめ 小面積の調査のため、92年度の隣接地での検出遺構との関連は不明である。

（神田）

野村台遺跡位置図
（地形図「臼杵」使用）

117. 左津留（さづる）遺跡

所 在 地　臼杵市大字左津留字塚田
調査原因　圃場整備
調査期間　931201～931224
調査主体　臼杵市教育委員会
調査面積　30㎡
担 当 者　神田高士
処　　置　調査後破壊
台帳番号　新発見

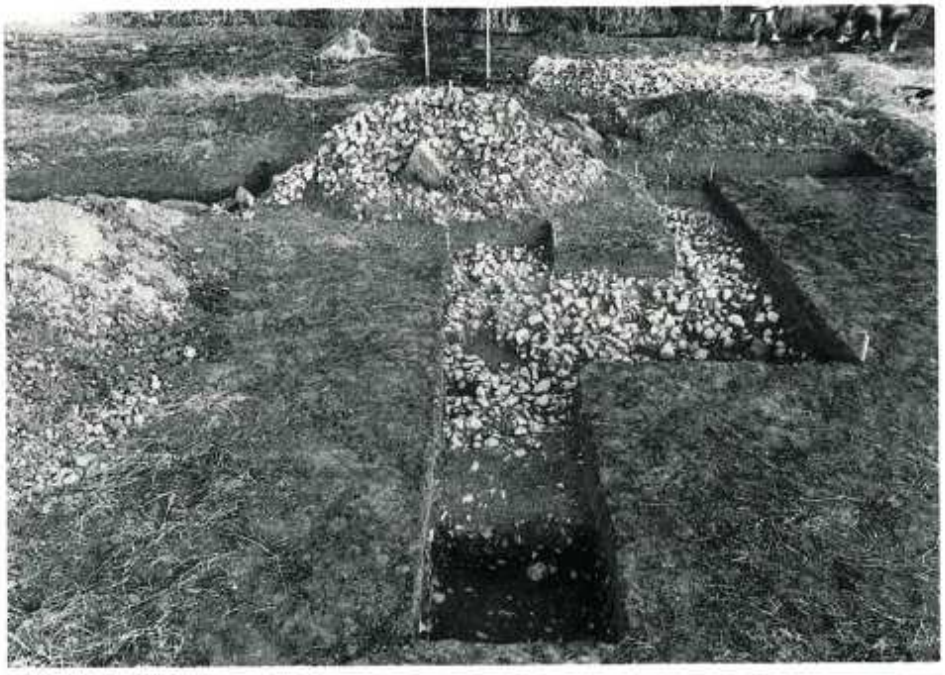
位　置　臼杵市の中南部、掻懐台地と中尾台地に挟まれた、左津留川に沿った谷あいの遺跡である。今回調査した積石塚は左津留川の右岸、中尾台地の据部の湿田中に所在していた。

遺　構　高さ１ｍ、直径2.5ｍの積石の遺構

遺　物　積石内から近世陶磁器片が出土

まとめ　伝承では15世紀の姫岳合戦の戦死者を祀ったものとあるが、塚自体は江戸時代以降に造られたものである。　（神田）

左津留遺跡位置図
（地形図「臼杵」使用）



118. 下中尾遺跡（しもなかお）

所 在 地 臼杵市大字中尾字観音寺
調査原因 急傾斜地区改良工事
調査期間 930528～930618
調査主体 臼杵市教育委員会
調査面積 135㎡
担 当 者 神田高士
処　　置 平成6年度本調査
台帳番号 323060

概　要 臼杵磨崖仏郡の西側の台地に所在する、下中尾遺跡における確認調査である。

台地西南隅（A区）と、その下から一段下がる形で台地の西、北縁をめぐる帯状の平坦部（B区）に適宜トレンチを設定して調査を進めたところ、A区で16世紀後半代に位置付けられる備前系大甕を埋めた埋甕遺構が確認された。B区からは溝状遺構が1条検出されている。

（神田）

下中尾遺跡位置図
（地形図「臼杵」使用）

119. 臼杵城下町遺跡（掛町地区）（うすきじょうかまち）（かけまち）

所 在 地 臼杵市大字臼杵字掛町
調査原因 駐車場建設
調査期間 940209～940301
調査主体 臼杵市教育委員会
調査面積 75㎡
担 当 者 菊田　徹
処　　置 調査後埋戻し
台帳番号 323066

概　要 市内の企業独身寮とりこわしと駐車場造成に伴う試掘調査である。調査区一帯は中世末に開かれた臼杵城下町の町屋敷地域にあたる。調査の結果、近代から16世紀末にわたる多量の陶磁器、瓦等の遺物が出土するとともに、近世初頭と思われる基石建物遺構が検出された。

（菊田）

臼杵城下町遺跡位置図
（地形図「臼杵」使用）

120. 井村遺跡（いむら）

所 在 地 臼杵市大字井村字高松
調査原因 私道建設
調査期間 931104～931127
調査主体 臼杵市教育委員会
調査面積 70㎡
担 当 者 神田高士
処　　置 調査後埋戻し
台帳番号 323038

概　要 70㎡という小範囲の調査ながら、多数の柱穴や土坑等を検出。竪穴遺構は円形プランのもので、弥生後期の住居跡と思われる。（神田）

井村遺跡位置図
（地形図「臼杵」使用）

121. 田篠台遺跡（西の原地区）（たしのだい）（にしはる）

所 在 地 臼杵市大字江無田字西の原
調査原因 住居建設
調査期間 940124～940203
調査主体 臼杵市教育委員会
調査面積 90㎡
担 当 者 神田高士
処　　置 平成６年度本調査
台帳番号 新発見

概　要 西の原地区は、平成元年度の調査で13基の竪穴遺構をはじめとする弥生後期～中世の遺構群が検出された制札場地区の北側にあたる。今回の試掘調査では中世の柱穴のほか、円形竪穴遺構が確認された。平成６年度に本調査を実施する。

（神田）

田篠台遺跡位置図
（地形図「臼杵」使用）

122. 由布川小学校遺跡（ゆふがわしょうがっこう）

所在地 大分郡挾間町大字古野
調査原因 道路建設
調査期間 940314～940323
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 約2,700㎡
担当者 友岡信彦
処置 平成6年度本調査
台帳番号 326030

概要 調査区は由布川小学校の南側で、大分医科大学の位置する下黒野遺跡からは北西に位置する。標高は120m前後を測り、台地をほぼ一望できる眺望の良い位置を占める。

調査は台地の平坦部に試掘トレンチ8本を設定し、表土層、床土を取り除いた。その結果、黒ボク層が現れ、上面及び層中から弥生時代後期の遺物が多量に検出された。遺構確認を行ったが、黒ボク層では遺構の存在は確認できなかった。黒ボク層は厚い所では1.5m以上ある。

黒ボク層下のローム層からは柱穴、遺跡を検出した。ただ黒ボク層からの堀込みかどうかは確認できなかった。（友岡）

由布川小学校遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

123. 辻遺跡（つじ）

所在地 大分郡挾間町大字三船字裏
調査原因 工場建設
調査期間 940214～940302
調査主体 挾間町教育委員会
調査面積 600㎡
担当者 橋本一彦
処置 平成6年度本調査
台帳番号 新発見

概要 遺跡は挾間町の東端、中央よりやや北寄りに位置し、由布川の形成する河岸段丘上の独立した台地とその周辺に立地する。台地の西端は三船地区の公民館と神社が既存している。

調査は、台地上（A区）と北側の台地下（B区）に5本、B区の北側（C区）に2本のトレンチをそれぞれ設定して行った。その結果、B区とC区からは明確な遺構・遺物とも確認されなかったが、A区から縄文早期の無文土器と集石遺構が確認された。よって来年度本調査を行うこととした。（橋本）

辻遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

124. 下金(したがね)遺跡

所在地	大分郡挾間町大字三船字下金	**調査面積**	1,500㎡
調査原因	工場建設	**担当者**	橋本一彦
調査期間	931202～940107	**処　置**	調査後破壊
調査主体	挾間町教育委員会	**台帳番号**	新発見

概　要　遺跡は挾間町の東側ほぼ中央、標高約100m前後の台地上に位置する。谷を隔てた南側の台地上には弥生時代の包蔵地である下原遺跡が存在する。調査区は、北と西に向かって傾斜した斜面上に在り、眼下に由布川が、また正面には高崎山や鶴見岳・由布岳が見渡せる眺望の良さである。調査の結果、溝状遺構2条・土坑7基・焼土穴・柱穴等を検出した。しかし、遺物が皆無に等しく時期については不明である。　（橋本）

文献：『挾間町誌』挾間町誌編集委員会、1984

下金遺跡位置図
（地形図「大分」使用）

column ⑨

復位された仏頭

平成5年度は臼杵磨崖仏保存修理工事の最終年次にあたり、古園石仏において剥落仏体片の復位をはじめとする保存工事が財団法人美術院により行われた。

大日如来の仏頭復位もこの保存修理工事に伴い平成5年8月25日に実施された。仏頭復位にあたってはそれまでに賛否両論の意見が様々な人達から寄せられたが、今ではその騒ぎが嘘だったように、静寂の空間の中、大日如来像は幽玄の美を湛えている。

125. 柳原（やなぎばる）遺跡

所在地 大分郡庄内町大字大龍字柳原
調査原因 保養施設建設
調査期間 930927～931104
調査主体 庄内町教育委員会
調査面積 2,000㎡
担当者 村上久和
処　置 記録保存
台帳番号 327018

位　置 大分川の中－上流域に位置する庄内町は大分県ほぼ中央に位置する。町の中央を大分川が流れその南北側はそれぞれ台地・丘陵・山地となっている。

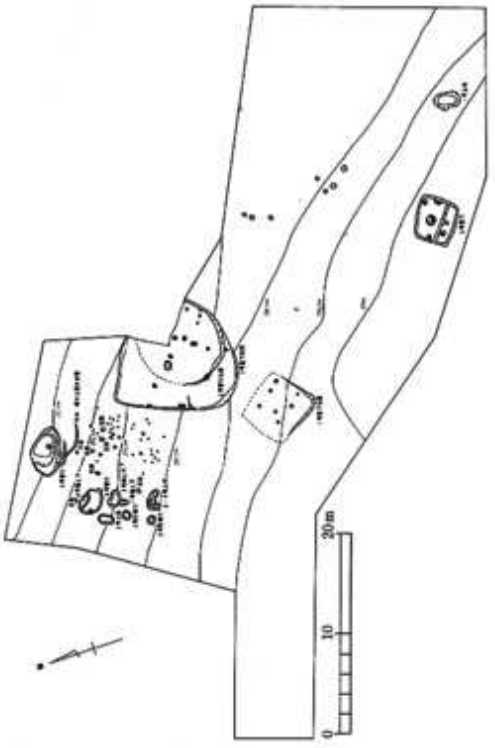
遺跡の立地する丘陵は大龍山から延びる丘陵先端である。

柳原遺跡位置図
（地形図「別府」使用）

遺　構 平成4年の試掘調査結果をもとに行った今回の調査では、弥生時代中期後半－末前後の竪穴住居跡2棟、同後期末の竪穴住居跡2棟、縄文時代後期の楕円形竪穴、土坑、陥し穴、貯蔵穴と共に包含層、同早期の陥し穴3基等を検出した。

遺　物 出土遺物は弥生時代中期土器、砥石、石皿等、同後期土器、縄文時代早期土器、同後期－晩期土器及び扁平打製石器・磨製石斧・スクレイパー・石皿等が出土した。

まとめ 柳原の調査では縄文時代早期－前期の陥し穴、縄文後期の竪穴1基、弥生時代中期の竪穴住居跡2軒、同後期の竪穴住居跡2軒など小規模な集落を形成する。この種の小規模集落の性格については今後検討する課題となろう。　（村上）



文献：『柳原遺跡』庄内町教育委員会、1994

126. かわじ池遺跡

所 在 地	大分郡湯布院町大字川北字城ケ尾	**調査面積**	約2,000㎡
調査原因	九州横断自動車道建設	**担 当 者**	佐脇義敏
調査期間	931118～940331	**処　　置**	一部盛土による現状保存
調査主体	大分県教育委員会	**台帳番号**	新発見

位　置　遺跡は、湯布院盆地を取り囲む西側丘陵地帯にある。河内山から南方へとひらかれた谷部平坦地に位置しており、南側を除く三方を大小の丘陵に囲まれている。遺跡の範囲は南北に約80m、東西に約22mであり、舌状に南西部に向かって緩やかに傾斜している。中央部の標高は約545mである。

遺　構　谷底でもあり、当初は南西部への流れ込みが予想されたが、層位的には比較的しっかりしており、かなりまとまった遺構が検出できた。古墳時代住居跡2基、縄文時代早期末から前期にかけてと考えられる集石遺構約50基（遺跡の西側に集中）、縄文時代住居跡1基などが検出された。さらに遺跡西側中央部より、アカホヤ下層から半径約5mの範囲で半円状に配石されたとみられる遺構も検出できた。

遺　物　古墳時代から縄文時代にわたる土器・石器が出土した。特に縄文前期の轟式土器は量的に多くみられ、姫島産の黒曜石による石鏃・チップ類も多く出土した。

まとめ　当遺跡は谷底平坦地という条件にもかかわらず、縄文時代から古墳時代にわたって生活の場として利用されてきた。特に轟式土器を生み出す縄文前期には、集石・配石遺構を伴い、祭祀的な意味も含めたベースキャンプサイトとしての性格も充分に考えられる。　（佐脇）

かわじ池遺跡位置図
（地形図「別府」使用）

127. 鶴見獄遺跡（つるみだけ）

所 在 地　大分郡湯布院町大字塚原
調査原因　競技場建設
調査期間　931124～931126
調査主体　湯布院町教育委員会
調査面積　10㎡
担 当 者　村上久和
処　　置　記録保存
台帳番号　新発見

位　置　遺跡は由布岳の西側丘陵上に位置し、現在リック・スプリングバレーの保養施設が作られている。施設内には火山の噴火口も見られ、この地域が由布岳の一部であったことがわかる。

遺　構　11月上旬、株式会社リック・スプリングバレーが競技場建設のため造成を行なっていた時に若干高まりのある地点で鉄製羽釜内に多量に古銭が入った物を発見した。当社より湯布院町に通知があり、その性格を知るために発掘調査を実施した。羽釜はすでに元位置に無かったが、それが出土したと思われる地点を中心に遺構確認を行なった。

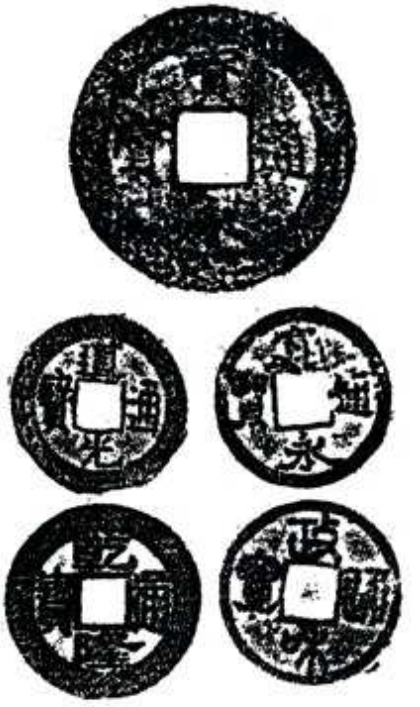
その結果、羽釜は東西90cm、南北50cmの楕円形土坑の中に納められていたらしく土坑内より24枚の貨銭が出土した。この貨銭のなかでは文久永宝（1863年初鋳）がもっとも新しいのでこれらの物が江戸時代末以降に埋納された物であることが明らかになった。

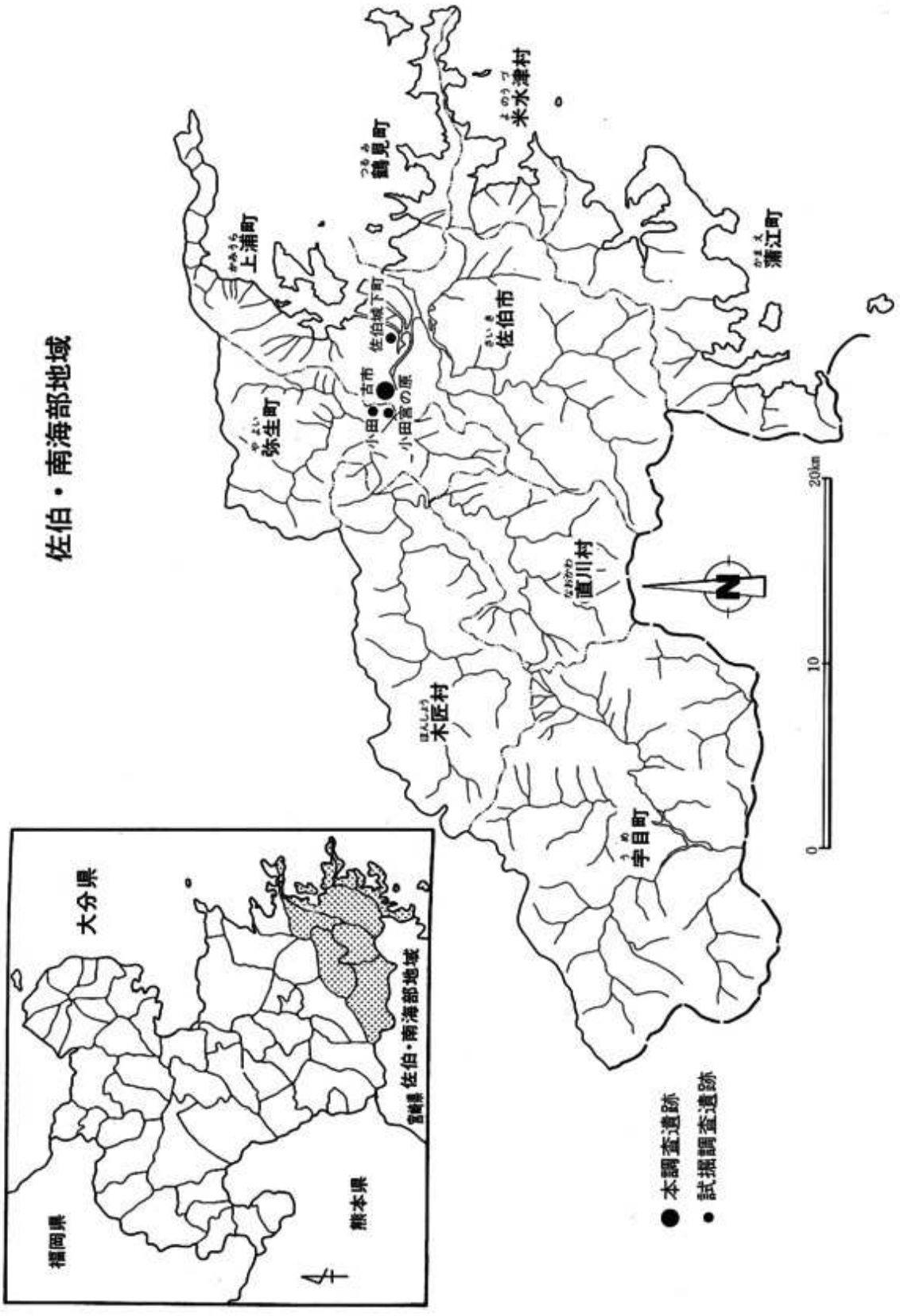
遺　物　出土遺物は古銭800枚前後、キセル2個、矢立2本、鉄製手燭と思われるもの2個などが出土した。

古銭の中で最も多いのは寛永通宝で約700枚前後、次いで文久永宝60枚前後、天保通宝が30枚前後である。

まとめ　この遺跡の性格については明確な事は不明であるが、羽釜を埋納した土坑が東西軸に一致している点、東西線上に伽藍岳山頂が乗る事、周辺に鬼の箕・鬼の臍等の地名があることから鶴見・由布岳信仰に関わるものであろうか？　（村上）

鶴見獄遺跡位置図
（地形図「別府」使用）


出土銭貨拓影図


佐伯・南海部地域
上浦町
鶴見町
米水津村
蒲江町
佐伯城下町
佐伯市
弥生町
小田
古市
小田宮の原
直川村
木匠村
宇目町
0
10
20km
N
大分県
福岡県
熊本県
宮崎県
佐伯・南海部地域
● 本調査遺跡
• 試掘調査遺跡

128. 向坂本地区（むこうさかもと）

所在地 佐伯市大字稲垣字向坂本
調査原因 道路建設
調査期間 931108～931112
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 約400㎡
担当者 綿貫俊一
処置 予定通り工事
台帳番号 ―

位置 向坂本地区は上岡駅の北東方向にあたる番匠川の自然堤防上にある。標高は約3m。道路予定地内にトレンチ（2m×10m）を20箇所入れ、発掘作業を行なった。その結果、何の遺構・遺物も検出されなかった。（綿貫）

向坂本地区位置図
（地形図「佐伯」使用）

column ⑩

割掛遺跡は1992年の発掘調査によって確認された、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての墓地を伴う集落跡と、鎌倉時代から室町時代にかけての堀や土塁を廻らす館跡との複合遺跡です。

弥生時代から古墳時代にかけての遺構としては、竪穴住居跡が20数基と石棺墓・石蓋土壙墓が5基確認され、石棺墓などの内容や副葬品からみてこの地域の拠点的集落の南端部を占める遺跡であることが解りました。

中世の遺構としては、13世紀代の館跡の一部が確認されました。館跡は1辺80m以上にも及ぶ掘割を持つもので、この当時の館跡としては西日本では最大級の規模です。

現在、遺跡の大部分は保存され水田の下に埋まっています。また1993年8月12日には遺跡の一部、約3,000㎡が市の史跡指定を受けました。

新指定史跡の紹介②　豊後高田市史跡割掛遺跡

129. 佐伯藩城下町遺跡群（大手町Ａ遺跡）

所在地	佐伯市大手町１丁目57－３	**調査面積**	152㎡
調査原因	美術館建設	**担当者**	村上久和
調査期間	940131～940204	**処置**	1994年度本調査
調査主体	佐伯市教育委員会	**台帳番号**	430012（佐伯城下町として周知）

概要 本調査地点は毛利氏の築いた鶴谷城三の丸跡の南東に位置し、西には中世佐伯市の拠点となった栂牟礼城跡がある。当該地には明治４年頃の絵図に、1861年毛利氏の別宅として建てられたとされる天祐館という屋敷が記されている。

調査ではトレンチを４カ所、グリッドを３カ所設定した結果、濠跡、礎石建物跡、土壙等を確認し、遺物は17～18世紀の肥前陶磁器、備前擂鉢等が出土した。

今回の試掘調査では遺物の年代から天祐館以前の遺構が検出されたことになる。詳細については平成６年度の本調査に期待したい。（吉武）

大手町Ａ遺跡位置図
（地形図「佐伯」使用）

文献：原田昭一他『栂牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』佐伯市教育委員会、1994

130. 小田遺跡

所在地 南海部郡弥生町大字小田字小田　**調査面積** 90㎡
調査原因 林道建設　**担当者** 高橋信武
調査期間 931101～931110　**処置** 計画通り工事
調査主体 弥生町教育委員会　**台帳番号** 432001（栂牟礼城跡として周知）

概要 中世山城跡の小田山城跡の周辺に林道建設が計画されたので、城跡を破壊せぬように路線の修正を求め、なお修正路線を試掘（1～3トレンチ）し遺跡を確認した場所については発掘調査を行った。

このうち遺跡が見つかったのは、北側の狭い谷に向かって延びた尾根の先端部を占める場所である。谷底との比高差約7mの狭い尾根上に基盤岩から4枚の層序があり、第3層のアカホヤ火山灰層の上の層から縄文時代中期の船元式土器と姫島産黒曜石の削器が出土した。狩猟関連の遺跡であろう。（高橋）

小田遺跡位置図
（地形図「佐伯」使用）

文献：『小田山城跡と関連遺跡』弥生町文化財調査報告書第3集 弥生町教育委員会、1994

131. 小田宮の原遺跡

所在地 南海部郡弥生町大字小田字宮の原　**調査面積** 71㎡
調査原因 林道建設関連　**担当者** 高橋信武
調査期間 931115～931207　**処置** 現状のまま
調査主体 弥生町教育委員会　**台帳番号** 432001（栂牟礼城跡として周知）

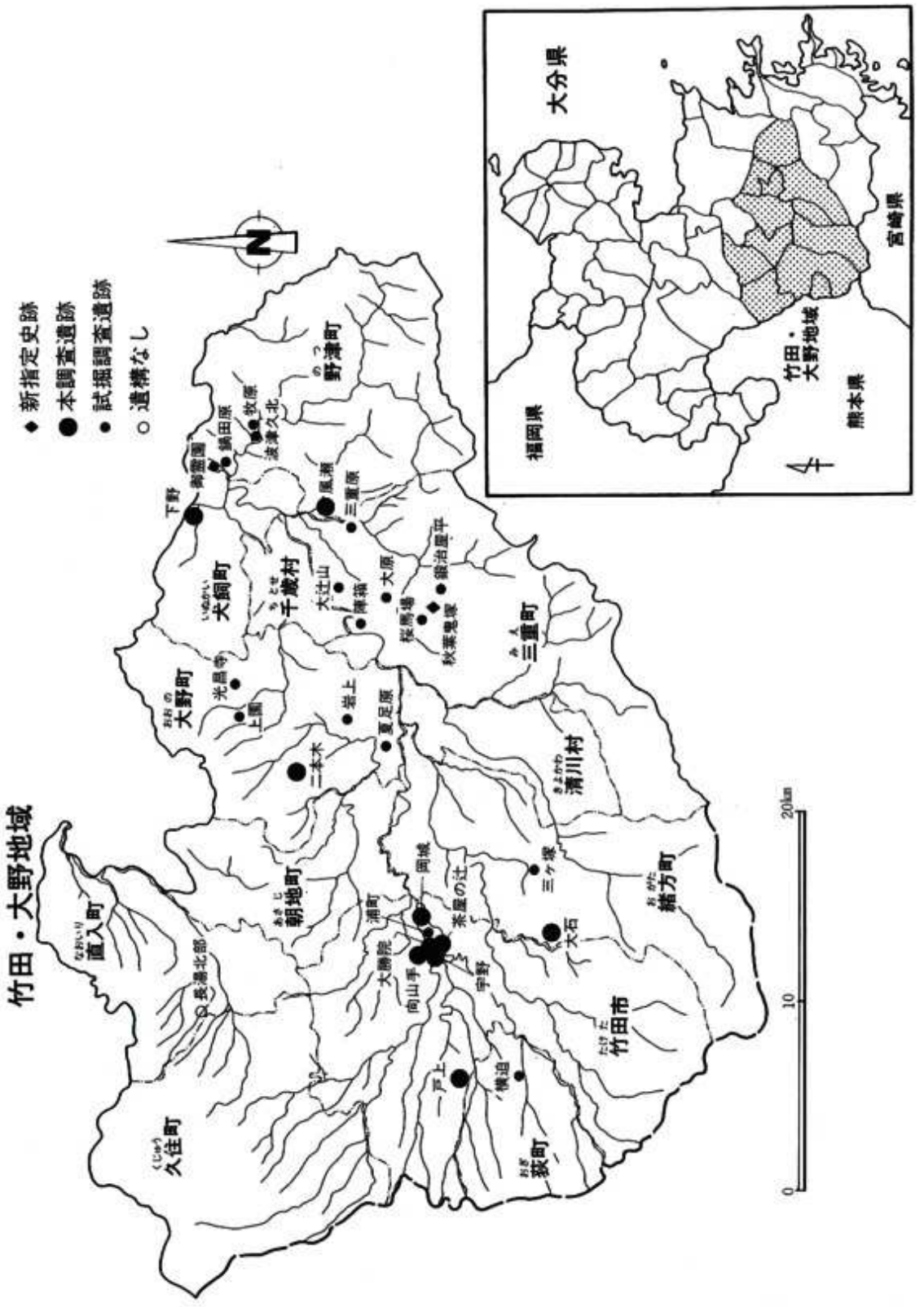
概要 前記の林道建設に関連して林道通過地区の前面の台地を試掘した。現状は畑地として利用されているこの台地を取り巻くように「しもんきど」・「でぼりぐみ」という地名があり中世の名残らしい。

6ケ所のトレンチ調査を行った結果、マメンコ（40,000年前）下層でチャート片、縄文早期の包含層、弥生～古墳時代の竪穴住居跡、鎌倉時代頃の中世の柱穴多数と堀と製鉄炉の破片等を検出した。弥生町での発掘調査は上小倉磨崖石塔・上小倉横穴墓に次ぐもので、考古学的な空白を埋める資料となった。

（高橋）

小田宮の原遺跡位置図
（地形図「佐伯」使用）

文献：『小田山城跡と関連遺跡』 弥生町文化財調査報告書第3集 弥生町教育委員会、1994


竹田・大野地域
◆ 新指定史跡
● 本調査遺跡
● 試掘調査遺跡
○ 遺構なし
N
大分県
福岡県
熊本県
宮崎県
竹田・大野地域
久住町
直入町
長湯北部
朝地町
大野町
犬飼町
千歳村
野津町
三重町
清川村
緒方町
竹田市
荻町
下野
神宮園
鎌田原
牧原
法華院北
風渕
三重原
大辻山
陣鉢
大原
桜馬場
秋葉鬼塚
鍛冶屋平
光昌寺
上圃
岩上
夏足原
二本木
浦町
岡城
大勝院
向山手
茶屋の辻
宇野
三ヶ塚
大石
一戸上
横迫
0
10
20km

132. 向山手遺跡（むこうやまて）

所在地 竹田市大字飛田川字向山手
調査原因 河川改修
調査期間 930413～931119
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 約3,200㎡
担当者 玉永・橋本・魚瀬
処　置 調査後破壊
台帳番号 新発見

位　置 遺跡は、竹田市街地の西側に位置し、稲葉川の北岸に立地する。ここは、岡藩の武家屋敷跡で東側の一段高い部分が武藤家に、西側の低い所が上家になる。周辺には、天明7年（1787）に描かれた絵図からあと12軒の武家屋敷があったようである。調査は昨年からの継続であり、武藤家の未調査部分と上家全体、更に新たに武藤家北側の1段高い所で検出した石垣と建物跡について行った。

向山手遺跡位置図
（地形図「竹田」使用）

遺　構 江戸時代：武家屋敷跡2軒
武藤家：礎石・石垣・門跡・井戸
上家：礎石・雨落ち溝・土坑
武藤家は残存状態は良く、建物のほぼ全体が確認され、一回の建て替えが行われていることが判った。また、武藤家の北側に石垣と建物跡、さらに武藤家と建物跡をつなぐ道を確認した。上家は撹乱が著しいが礎石と思われる石列や門跡等を確認できた。

遺　物 遺物は武藤家・上家ともに、主として18世紀末から幕末にかけての陶磁器などを出土した。中には焼き継ぎが認められるものがあり、武藤の文字が読める。また、硯の裏に上家と読めるものも出土している。

まとめ 今回の調査で岡藩の250～ 300石クラスの、武家屋敷における敷地と建物の規模等を把握することができた。（橋本）

133. 岡城跡（おかじょうあと）

所在地	竹田市大字竹田字岡	**調査面積**	1,400㎡
調査原因	史跡整備	**担当者**	佐伯　治
調査期間	930601～931031	**処　置**	埋め戻し
調査主体	竹田市教育委員会	**台帳番号**	539088

位　置　史跡岡城跡は、岡藩主中川氏の居城である。寛文4年（1664）に西の丸御殿が普請され、現在残っている縄張りの基礎が築かれたとされている。

この岡城は、稲葉川と白滝川が合流する付近の阿蘇溶結凝灰岩を基礎とする標高約320mの台地上に築かれている。

整備は、昭和60年度から着手し、今日に至っている。その主な整備の柱は、石垣の保存修理と遺構復元及び保存整備からなっている。

今年度の調査は、西の丸跡北側に位置し、普請方跡に隣接する家老屋敷跡と賄方から近戸門に至る通路において実施した。

岡城跡位置図
（地形図「竹田」使用）

遺　構　家老屋敷跡は、東側のほぼ半分を調査した。また、建物跡には数寄屋を含み、これに関連すると思われる庭園遺構を検出した。

これらの時期については、整理作業中であり、不明瞭であるが、ほぼ江戸後期と思われる。

家老屋敷跡発掘調査状況

遺　物　ほぼ調査区の全体から出土している。

陶磁器類、瓦等が出土しているが、時期は、概ね江戸後期と思われる。

まとめ　家老屋敷跡のほぼ半分を調査しただけであり、全体像をつかむに至っていないが、建物と庭の関係をつかめたのは今回の成果であろう。

調査は、平成6年度に継続する予定である。なお、調査区位置図は127ページ参照のこと。

134. 大勝院跡（だいしょういんあと）

所在地　竹田市大字竹田字八幡山
調査原因　防火施設設置
調査期間　931026～931110
調査主体　竹田市教育委員会
調査面積　220㎡
担当者　佐伯　治
処　置　一部保存・一部調査後工事施工
台帳番号　新発見

位　置　大勝院跡は、文禄3年（1594）に中川氏が入部してから建立され、廃仏毀釈により明治2年（1869）に廃寺となった。

大勝院跡は、市街地の東に位置し、市街地を臨む八幡山に存在する。

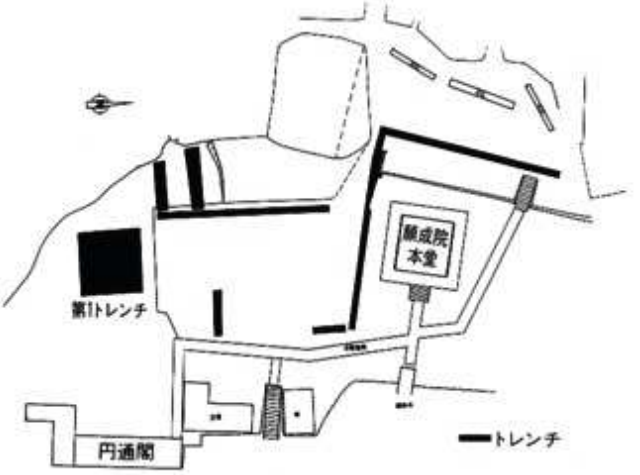
この地は、廃寺後、願成院となっており、現在、寛永年間造営の国指定重要文化財である愛染堂を本堂としている。

大勝院跡位置図
（地形図「竹田」使用）

遺　構　調査は、願成院本堂（愛染堂）の南側部分で実施した。貯水槽設置予定地を第1トレンチとし、配管予定地にトレンチを設定し調査を行った。この結果、第1トレンチにおいて、遺物遺構を示す柱穴の配置がみられるとともに、3条の溝条遺構を検出した。

この建物遺構は、柱穴の配置から2時期以上の存在が考えられた。

この結果により、出土遺物から大勝院跡の遺構と判断されるため、遺構保存から貯水槽予定地を変更した。



第1トレンチ実測図

遺　物　遺物は各トレンチから出土している。

陶磁器類、瓦等は、概ね江戸後期のものであった。

まとめ　今回の調査は、消化設備が埋設される箇所のみの限られた調査であったため、大勝院全体の遺構配置を確認するにいたらなかったが、大勝院の存在が確認できたことは今後に大きな課題を投じた。

135. 茶屋ノ辻近世墓地群（ちゃやのつじきんせいぼちぐん）

所在地	竹田市大字竹田字茶屋ノ辻	**調査面積**	4,000㎡
調査原因	運動公園建設	**担当者**	城戸　誠
調査期間	930524～930915	**処　置**	調査終了後工事予定
調査主体	竹田市教育委員会	**台帳番号**	新発見

位　置　岡城が立地する同一丘陵上に遺跡は立地し、岡城の東南2㎞に位置する。

遺跡は、蛇行した痩せた尾根と谷がいくつも延びる地形にみられる。この尾根の頂部及び頂部に近郊する裾部に、近世墓地が築造されている。

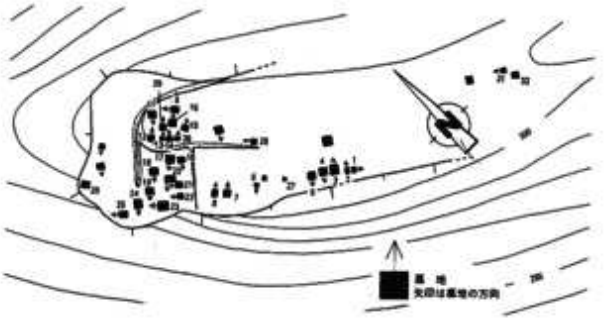
茶屋ノ辻近世墓地位置図
（地形図「竹田」使用）

遺　構　近　　世：墓地56基
時期不明：土坑1基

墓地群は13地区からなり、このうち近世墓地がみられるのはA～H地区の8地区である。今回の調査は、近世墓が多く現存していたA、D地区において実施した。調査例は、A地区では32基、D地区では23基であったが、その他として1基調査を行った。

A地区の調査では、元禄4年（1691）から元治元年（1864）の造営幅がみられた。墓壙の形態には円形と方形がみられた。前者には棺に桶が適用され、後者には箱型の棺が用いられたようである。

D地区の調査では、天和2年（1682）から文久3年（1863）の墓地造営幅がみられた。墓壙の形態は、A地区同様に、円形と方形がみられたが、棺に甕を使用する例がみられた。



D地区

遺　物　墓壙内から銅銭、土師質皿、釘、煙管、陶磁器、数珠等が出土している。

銅銭は1～6枚出土しているが、6枚の出土例が多かった。出土しなかった墓壙も存在していた。

土師質皿の出土枚数の例としては、大半が2枚であった。

煙管、陶磁器の出土例は数例であった。

まとめ　特に、A、D地区で調査した55基の墓地は墓標が明確なものに限って調査を実施した。これによると両地区の墓地の造営は、17世紀後半～末頃から一部現在まで行われていたようである。

墓地群は、墓標に刻まれた年代からみると18世紀代のものが多く、この時期に集中する傾向がみられる。

また、墓壙の形態の変遷が窺え、円形から方形への移行がみられる。この画期は、およそ18世紀後半と思われる。

文献：『岡藩城下町遺跡群、竹田地区南部遺跡群V』竹田市教育委員会、1994

136. 戸上（とうえ）遺跡

所 在 地 竹田市大字戸上
調査原因 国道拡幅工事
調査期間 931221～940325
調査主体 竹田市教育委員会
調査面積 8,042㎡
担 当 者 城戸 誠
処　　置 調査終了後工事施行
台帳番号 新発見

位　置　この遺跡は、竹田市の西部、熊本県境に広がる菅生台地の東端に位置する。この台地は、阿蘇山の火砕流を基盤とした火山性台地で、特に、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に大集落を形成した舞台となった。

遺跡は、この台地上先端に立地している。

戸上遺跡位置図
（地形図「竹田」使用）

遺　構　検出された遺構は、掘立柱建物、礎石建物、堀割り遺構、土坑、柱穴群、旧道路等である。

掘立柱建物は、南北を棟とする庇を有するものを1棟検出した。桁行側が調査区外に延び、その柱間は不明であるが、今回の調査では3間を検出した。梁間は4間である。庇は西側に付設している。この建物時期は、柱穴内出土遺物から江戸期と思われる。

礎石建物は、礎石の一部を確認したに留まり、全体像は不明である。時期は不明である。

堀割り遺構は、今回の調査では一部の検出であり、幅が5m～7mであったことは確認されたが、長さは確認できていない。断面は、二段掘りの逆台形状を呈している。時期は、出土遺物及び掘割りの状況から江戸期の所産と思われる。

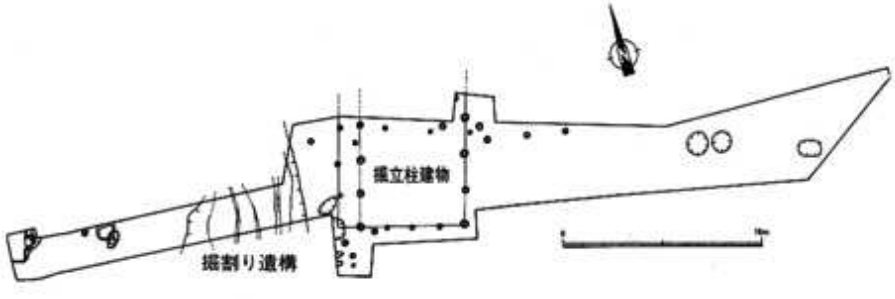
旧道路は幅員3mであり、時期は明治前半を溯るものと思われる。

遺　物　遺物は、大半が江戸期及びそれ以後の陶磁器類であった。特筆すべき遺物は出土していない。

まとめ　掘立柱建物、礎石建物、堀割り遺構は、近接して存在するため、それぞれの関連性が注目される。堀割り遺構は、その構造から通路としての機能が考えられ、その時期からしても掘立柱建物との関連が深いものと思われる。

菅生台地での近世農村に関する発掘調査により今後の近世農村解明の資料提示となった。

文献：『戸上遺跡』竹田市教育委員会、1994



遺構配置図

137. 宇野屋敷跡（うのやしきあと）

所在地	竹田市大字竹田字山手	**調査面積**	220㎡
調査原因	街路整備	**担当者**	城戸　誠
調査期間	930916～931208	**処　置**	調査終了後工事予定
調査主体	竹田市教育委員会	**台帳番号**	539085（城下町遺跡として周知）

位　置　市街地である城下町跡内の西に位置し、八幡山と称される丘陵の裾部に立地している。この裾部は、阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする火山灰堆積によって形成された丘陵を稲葉川が侵食して形成されたものである。

遺　構　江戸時代：礎石建物２棟、土坑１基

この屋敷跡の面積は、ほぼ1,000㎡と思われるが、今回の調査は、この面積のほぼ５分の１において実施した。

検出された建物遺構の１棟は、石垣に沿って東西に長いもので、屋敷跡入口部分に寄っているため使用人等の居住場所かあるいは納屋的建物と推察される。もう１棟は、石垣付近から南側に延びるものと思われ、その礎石の状態からこの屋敷に占める主要な建物の一部ではないかと推察される。

土坑は、直径約1.4m、深さ約1.0mであった。土坑内からの遺物の出土は差ほどなかった。

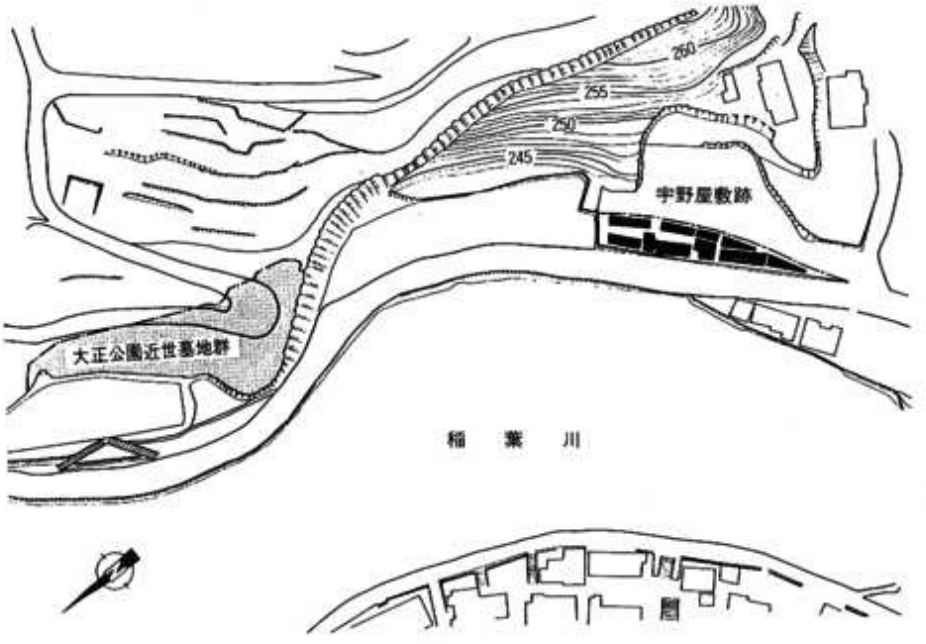
宇野屋敷跡位置図
（地形図「竹田」使用）

遺　物　江戸時代後期：陶磁器類

取り上げて記すべき遺物は、みられなかった。

まとめ　今回の調査では、屋敷地の５分の１程度を調査しただけであり、建物の配置や構造を把握するに至らなかった。

文献：『岡藩城下町遺跡群、竹田地区南部遺跡群Ⅴ』竹田市教育委員会、1994



138. 神楽岡寺遺跡（かぐらおかでら）

所在地 竹田市大字吉田字横枕～篠田都留
調査原因 県道拡幅
調査期間 930917
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 300㎡
担当者 玉永光洋
処置 予定通り工事
台帳番号 539103

概要 県道竹田玉来線道路改良工事に伴い、試掘調査を行った。調査地点は沖積地にあたり、何らかの遺跡の存在が推測されたが、縄文土器一点と柱穴一ケ所が検出されただけで、遺跡の広がりは認められなかった。

神楽岡寺遺跡位置図
（地形図「竹田」使用）

139. 浦町遺跡（うらまち）

所在地 竹田市浦町
調査原因 河川改修
調査期間 930426～930514
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 約60㎡
担当者 玉永光洋・橋本一彦
処置 調査後破壊
台帳番号 新発見

概要 調査区は竹田市街地の北側、稲葉川の川辺、竹田橋横に立地する。対岸には豊後竹田駅があり周辺は商店街として賑わっている。調査は昨年からの継続であり本年度は川岸に降りる階段を確認した。階段下部は既に破壊され、部分的にも攪乱されており保存状態はあまり良くない。その他、階段に伴うと思われる石垣と、さらに外側に石垣を確認した。外側の石垣は竹田橋の橋脚とつながっており、おそらく大正時代以降に積まれたものであろう。内側の石垣と階段は明治時代の所産と考えられるが、大正時代に造られたという情報も得たので、正確な時期は不明である。（橋本）

浦町遺跡位置図
（地形図「竹田」使用）

140. 風瀬（かざせ）板碑

所在地　野津町西畑
調査原因　修復前調査
調査期間　930524～930723
調査主体　野津町教育委員会
調査面積　20㎡
担当者　村上久和
処　置　修復
台帳番号　県指定540002

概　要　野津町風瀬から三重町に通じる古道に面した丘陵の斜面に立っており、全面はレキ石積みで板碑を保護した状態で背面下半部は土中に埋っている。板碑は総高253cmで長さ、幅、高さとも30cmの元禄銘のある台石上に差し込まれており、板碑との隙間に寛永通宝が2個差し込まれていた。碑は山形の頭部・二条線・額部・碑身からなり、額部に種子アを彫り、身部上半分には蓮華座上にキリークの凡字を彫る。下半部には明徳三年（1393）5月16日銘の年号が認められる。発掘調査の結果、この板碑は当初からこの場所にあったが元禄前後に中央部分が折れたため、台石およびレキ石を積み上げたものである事が明らかとなった。

出土遺物　出土遺物は新寛永通宝2枚である。

（村上）

風瀬板碑位置図
（地形図「犬飼」使用）

141. 牧原遺跡（まきばる）

所 在 地 大野郡野津町大字牧原
調査原因 天地返し
調査期間 931130～931207
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 80㎡
担 当 者 後藤一重
処　　置 予定通り工事
台帳番号 540044

概　要 野津川に臨む台地上に位置する。ここでもかつて畑地帯総合土地改良事業が実施されているため、遺跡の残存状況が心配されるところであった。

調査対象の畑は、いずれも台地の斜面部に位置する。重機を使用し調査を行ったが、いずれもクロボク層の厚い堆積がみられた。ローム層にいたり、作業員による精査を行い旧石器時代包含層の確認につとめた。その結果、問題となる遺構・遺物は確認されず、予定通り工事を実施した。（後藤）

牧原遺跡位置図
（地形図「犬飼」使用）

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2　大分県教育委員会、1994

142. 波津久北遺跡（はつくきた）

所 在 地 大野郡野津町大字黍野
調査原因 天地返し
調査期間 931130～931207
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 600㎡
担 当 者 後藤一重
処　　置 現状保存
台帳番号 540042

概　要 当地区は台地上の面積が広く、大規模な遺跡の存在が予想された。試掘調査の結果、旧石器時代包含層、縄文時代早期集石、弥生時代後期竪穴住居跡、中世炭窯などが検出された。旧石器時代包含層は、流紋岩製小型ナイフ形石器などが集中するもので、このような遺物集中地点が台地上に点在することが考えられた。また、弥生後期の竪穴住居跡についても、同様に台地全体に広がるものと思われた。以上から、地権者の御理解により、事業を中止し遺跡の保存につとめることとした。（後藤）

波津久北遺跡位置図
（地形図「犬飼」使用）

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2　大分県教育委員会、1994

143. 御霊園遺跡（ごりょうぞの）

所在地 大野郡野津町大字西寒田字御霊園　**調査面積** 160㎡
調査原因 天地返し　**担当者** 後藤一重
調査期間 931130～931207　**処置** 予定通り工事
調査主体 大分県教育委員会　**台帳番号** 540029

概要 緩やかな傾斜をもつ台地上である。しかし、すでに畑地帯総合土地改良事業が実施されているため、遺跡の保存状況が心配されるところであった。

2ヶ所の畑で調査を実施した。1ヶ所は畑地帯総合土地改良事業の際、谷地形を埋めた部分で数mのクロボク土上にあるローム層からは遺構・遺物とも確認されなかった。もう1ヶ所については、耕作土下がすぐにローム層であったが、ローム層中からは遺物の出土は認められなかった。（後藤）

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2　大分県教育委員会、1994

御霊園遺跡位置図
（地形図「犬飼」使用）

144. 鍋田原遺跡（なべたばる）

所在地 大野郡野津町大字西寒田字鍋田　**調査面積** 160㎡
調査原因 天地返し　**担当者** 後藤一重
調査期間 931130～931207　**処置** 現状保存
調査主体 大分県教育委員会　**台帳番号** 540028

概要 ここでは、かつて畑地帯総合改良事業が実施された際、試掘調査が行われ、良好な旧石器時代包含層が確認されている。

今回調査対象となった畑は前回の試掘で良好な旧石器時代包含層が検出された隣接地にあたる。調査の結果、ローム層中に流紋岩剥片等が出土した。その出土量は少量で散発的なものであったが、近接した場所に遺物集中地点が存在するであろうことが予想された。

遺跡の取扱いについて協議した結果、地権者の御理解により遺跡は全面的に保存された。（後藤）

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2　大分県教育委員会、1994

鍋田原遺跡位置図
（地形図「犬飼」使用）

145. 大辻山中世墳墓群（おおつじやまちゅうせいふんぼぐん）

所在地 大野郡三重町大字井迫字大辻ほか
調査原因 確認調査
調査期間 931207～940121
調査主体 三重町教育委員会
調査面積 12㎡
担当者 諸岡 郁
処置 現状保存
台帳番号 町指定541009

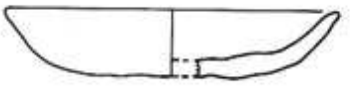
位置 遺跡は町北側の山麓の頂上に位置する。標高250mの山頂を中心に、周囲の屋根上に径6～12mのマウンド15基と、その上に24基の文禄5～慶長7年銘の石塔類が樹立されている。ほとんど盗掘されてるが、その可能性の少ない13・16号墳の2基を調査の対象とした。

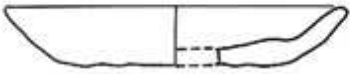
内容 13号墳は北側屋根上の傾斜地に位置し、径6m高さ2mの円形マウンドである。幅60cmのトレンチを十字方向に設定し、墳丘に沿って掘り下げたところ盛土状の土層を呈している。付近の地山にみられる多数の角礫が出土し、大きさは拳大から人頭までさまざまである。特に中心部には積み石状に集められ、一部凝炭岩も混入している。盛土内の遺構・遺物は全くみられなかった。

16号墳は西側尾根状に位置し、径6m高さ1.5mの円形マウンドである。中心から東西方向に幅60cmのトレンチを設定し、同様に掘り下げたところ、土層中から9～10世紀頃と思われる土師器坏片がみられ、特に地山近くから若干の礫と共にまとまって出土した。しかし土層中の遺構は確認できなかった。

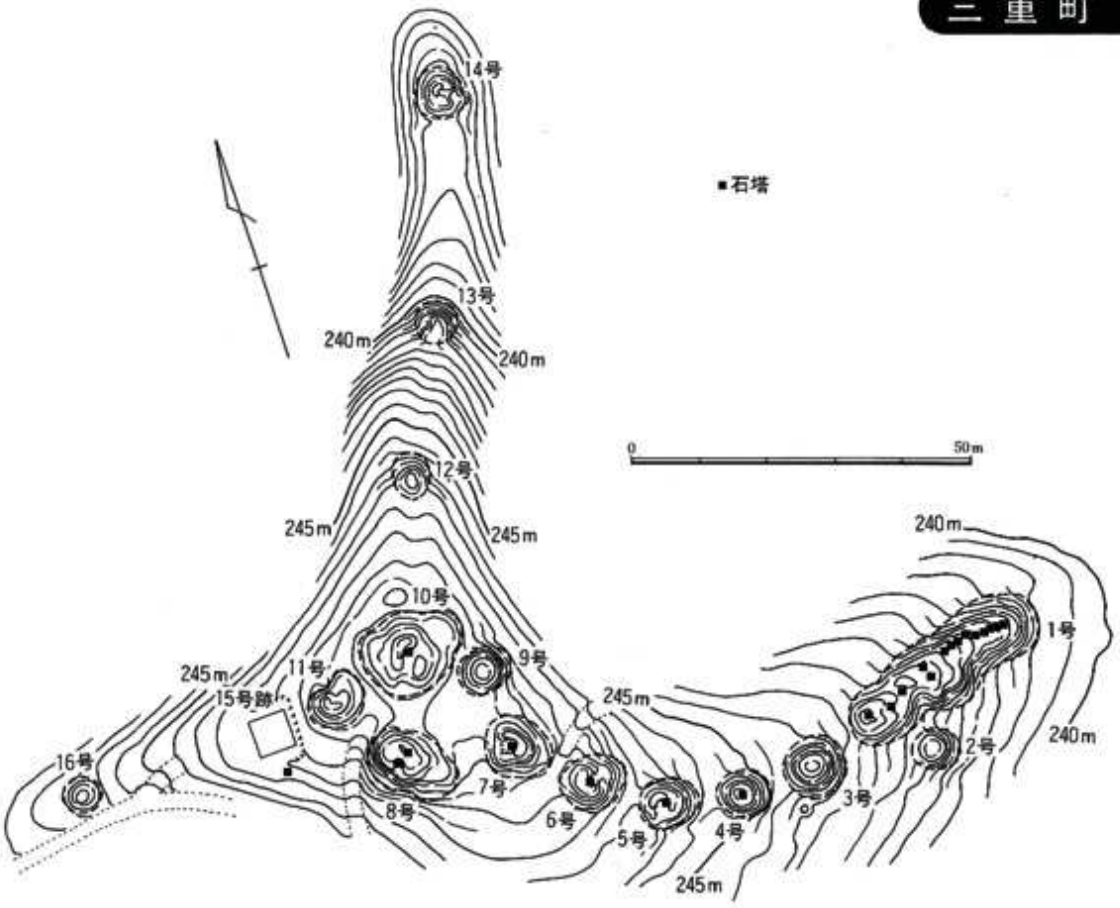
まとめ もともと墳墓として周知されていたが、今回の調査では墓としての遺構は確認できなかった。なお調査対象墳には石塔はみられないが、他の石塔には供養を示す銘文があるため、供養塚の可能性もある。古文書にも現れないこの遺跡の性格は不明な点が多く、今後の調査で実態の解明をする必要がある。 （諸岡）

大辻山中世墳墓群遺跡位置図
（地形図「犬飼」使用）





出土遺物実測図



大辻山中世墳墓群遺構配置図

146. 三重原遺跡群（みえのはる）

所在地	大野郡三重町大字小坂字谷川原	**調査面積**	800㎡
調査原因	宅地造成	**担当者**	諸岡　郁
調査期間	940106～940107	**処　置**	工事実施
調査主体	三重町教育委員会	**台帳番号**	541045

位　置　調査対象地は町中心部より東部に広がる若干起伏のある広大な台地上にある。幅２ｍのトレンチを重機により表土剥ぎを行った結果、遺構・遺物は確認できなかった。良好な土層堆積状況であったが、まったく表採もできない状態であるため、本調査は必要なしと判断した。　（諸岡）

三重原遺跡群位置図
（地形図「三重町」使用）

147. 桜馬場遺跡群（さくらのばば）

所在地	大野郡三重町大字市場字桜馬場	**調査面積**	200㎡
調査原因	宅地造成	**担当者**	諸岡　郁
調査期間	940221～940221	**処　置**	工事実施
調査主体	三重町教育委員会	**台帳番号**	541078

位　置　調査対象地は西側より町中心部を望む、通称市原と呼ばれる台地上にある。幅３ｍのトレンチを設定し表土剥ぎを行った結果、遺構・遺物は確認できなかった。表採も全くできなかったので、本調査は必要なしと判断した。

（諸岡）

桜馬場遺跡群位置図
（地形図「三重町」使用）

148. 大原地区（おおはる）

所在地	大野郡三重町大字百枝字大原山	**調査面積**	1,200㎡
調査原因	体育施設建設	**担当者**	諸岡　郁
調査期間	930517～920518	**処　置**	工事実施
調査主体	三重町教育委員会	**台帳番号**	―

概　要　町中心部北側の通称大原と呼ばれる広大な台地上にある。平成３年度の調査地の近接地で、ここに体育館をはじめとする運動公園の建設が計画された。周知遺跡ではなかったが、地形的に遺跡の存在する可能性があったため、試掘調査を実施した。

4.3haの対象地にトレンチを設定し表土剥ぎを行ったが、前回調査と同様に遺構・遺物は全く検出できなかった。　（諸岡）

大原地区位置図
（地形図「三重町」使用）

149. 鍛冶屋平地区（かじやびら）

所在地 大野郡三重町大字内田字鍛冶屋平
調査原因 農道建設
調査期間 921104～921104
調査主体 三重町教育委員会
調査面積 100㎡
担当者 諸岡　郁
処　置 工事実施
台帳番号 ―

概　要 調査対象地は町中心部より南側の沖積盆地内である。周知遺跡ではなかったが、付近の三重川上流から鉄宰の出土が伝えられており、地名から製鉄関連遺跡の存在が考えられた。しかし重機による表土剥ぎの結果、遺構・遺物はまったく検出できなかったため、本調査は必要なしと判断した。（諸岡）

鍛冶屋平地区位置図
（地形図「三重町」使用）

150. 陣箱遺跡（じんばこ）

所在地 大野郡三重町大字百枝字陣箱ほか
調査原因 県道拡幅
調査期間 940207～940217
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 350㎡
担当者 諸岡　郁
処　置 平成6年度本調査
台帳番号 541037

概　要 大野川右岸の河岸段丘上に立地する。幅2m、延べ175mのトレンチを設定し、表土剥ぎをおこなったところ、竪穴式住居跡21基等を検出した。出土土器から弥生時代後期のものとみられ、平成4年度調査の百枝遺跡D地区と同一集落跡と思われる。協議のうえ、工事を延期し次年度本調査を行うこととなった。（諸岡）

陣箱遺跡位置図
（地形図「犬飼」、「三重町」使用）

151. 宇対瀬遺跡（うたいぜ）

所 在 地　大野郡三重町大字宇対瀬
調査原因　道路建設
調査期間　931115～931122
調査主体　大分県教育委員会
調査面積　約800㎡
担 当 者　綿貫俊一
処　　置　予定通り工事
台帳番号　新発見

位　置　宇対瀬遺跡は、大野川の河岸段丘上に立地する。付近では縄文時代晩期・弥生時代の土器片が散布していた。

上記のような状況から遺跡や遺構が良好に残されていることが予想された。このため試掘調査を行ったところ、微量の土器片が採取されただけで、ほかに遺構等は観察されなかった。しかし隣接する場所で家屋移転に伴う試掘調査では弥生時代の住居跡が見つかっており、場所によってはまだ存在する可能性があるので今後注意が必要であろう。　（綿貫）

宇対瀬遺跡位置図
（地形図「犬飼」使用）

152. 大石（おおいし）遺跡

所 在 地　大野郡緒方町大字大石
調査原因　広域農道建設
調査期間　9307～9309
調査主体　緒方町教育委員会
調査面積　600㎡
担 当 者　高野弘之
処　　置　調査後破壊
台帳番号　543064（範囲の拡大）

位　置　大石遺跡は、大分県南地域に位置し、緒方川の支流小園川と深く浸食された渓谷により隔絶された火山性の台地上に所在する。海抜は平均350ｍで、遺跡の南側には自然林を多く残す烏嶽、倉木山がそびえる。

大石遺跡位置図
（地形図「竹田」使用）

遺　構　縄文晩期末葉か弥生前期とおぼしき貯蔵穴1基を検出した。
　その他の遺構はなし。

遺　物　縄文晩期末葉の突帯文土器、浅鉢、深鉢形土器、赤色顔料をほどこした壷形土器片を多数検出した。大石遺跡は、膨大な量の扁平打製石斧で知られるが、今回の調査でほとんど石器類を検出しなかった。
　調査中、沈線と穴で装飾された香炉形土器ともいえる黒色磨研土器を検出した。精神文化を知る上で何等かの手がかりになろう。

香炉形土器

まとめ　昭和35年以来7回ほど試掘調査が行われてきたが、晩期末葉の遺物が纏まって出土したのは初めてであろう。晩期末葉の土器セットとしては、壷形、浅鉢形、深鉢形土器の3点セットが指摘されているが、今回の調査においても同様の遺物が検出されている。内陸部でも、この様な傾向があることの一例として注目される。
　縄文晩期に栄えた大石遺跡が、どの様な終末を迎えたのかを判断する一材料となろう。

（高野）

文献：栗田勝弘『緒方地区遺跡群発掘調査概報　』緒方町教育委員会、1989. 3
後藤一重『緒方地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』緒方町教育委員会、1990. 3
坂本嘉弘『東九州内陸部の弥生時代前期の様相』古文化談叢第30集（下）　1993. 8
高野弘之『大野川中流域広域農道建設に伴う発掘概報　　大石遺跡』緒方町教育委員会、1994. 3

153. 三ヶ塚遺跡（さんがつか）

所在地	大野郡緒方町大字中野	**調査面積**	200㎡
調査原因	広域農道建設	**担当者**	高野弘之
調査期間	9402～9403	**処置**	調査後破壊
調査主体	緒方町教育委員会	**台帳番号**	新発見

概要 三ヶ塚遺跡は、広域農道通過予定地に位置し、現況は放棄された桑畑と山林である。

昭和30年頃石棺が出土したと言われている所であり、分布調査の際に石器・土器片を採取したため、道路建設に先立ち試掘調査を行うことになった。石棺が出土した場所は、幸い農道予定地からはずれており、予定地内においても、遺構は検出されなかった。焼石が多数と扁平打製石斧が数点出土したが、全て表土からの出土であり、包含層は残っていなかった。

三ケ塚遺跡位置図
（地形図「竹田」使用）

桑畑として開拓された際に、全て破壊されてしまったようである。（高野）

column ⑪

史跡岡城跡 本丸南側石垣崩壊

平成5年7月30日、8月10日の台風6号、7号及びそれ以後の長雨の影響により崩壊した本丸金蔵跡の南側石垣の状況である。これにより旧石垣が崩壊した石垣の内側約3mの位置で検出された。石垣の積みからみても古い積みであることが理解できる。

154. 二本木（にほんき）遺跡（M地区）

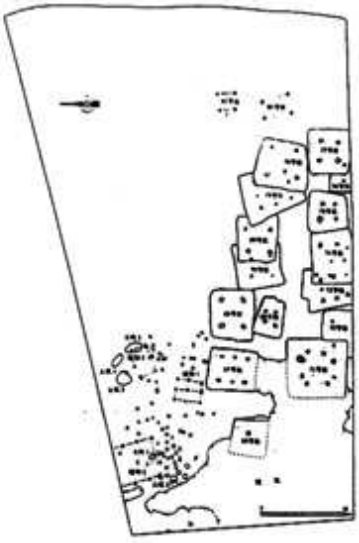
所在地 大野郡大野町大字屋原字木伏頭
調査原因 高率煙草栽培の為の土取り（個人事業）
調査期間 930607～931008
調査主体 大野町教育委員会
調査面積 2,034㎡
担当者 牧尾義則・後藤幹彦
処置 調査後破壊
台帳番号 545038

位置 二本木遺跡は、平井川によって侵蝕された大野原台地の西端部に立地している。この台地上での大規模畑地改良事業計画により1975～1978年度の間発掘調査が行なわれ、弥生時代後期の住居跡が100軒以上確認された。また1992年度の調査ではこの調査集落跡に付属すると思われる溝遺構が検出された。

二本木遺跡（M地区）位置図
（地形図「久住」使用）

遺構 弥生時代：住居跡　17、掘立建物　1、土坑　3
時期不明：掘立建物　2、土坑　2、柱穴多数
調査区南側から中央部にかけて12基の住居跡を検出した。また、調査区中央部から北側部分に柱穴群と土坑群が集中して検出されており、この中に掘立柱建物が3基確認出来た。

遺物 住居跡：壷、甕、高坏、石斧、石鏃、磨石、石皿、鉄鏃、手鎌。
掘立柱建物：壷、石鏃。
土坑：土器片、磨石、石皿。
柱穴群：土器片。


二本木遺跡（M地区）遺構図

まとめ 今回の調査によって、二本木遺跡集落密集部の北端が確認出来た。また、集落の北にある溝遺構までの約150mの間には一部をのぞいて明確な遺構は検出されておらず、これらの空間には全く別の性格を持つ施設が存在していたのではないかと考えられる。（後藤）

文献：後藤幹彦「二本木遺跡（M地区）」『大野地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』大野町教育委員会、1994　P 3～7

155. 光昌寺遺跡（B地区）

所在地	大野郡大野町大字十時字光昌寺	**調査面積**	3,500㎡
調査原因	地域農業確立総合対策事業（天地返し工事）	**担当者**	後藤幹彦
調査期間	931201～931207	**処置**	調査後破壊
調査主体	大野町教育委員会	**台帳番号**	545092

概要 試掘対象区は、大野町の中心部より東方にある台地上（標高約230m）に位置する、東から西方向に下降しながら伸びる畑地である。

試掘方法としては、北東から南西方向にトレンチ3本（1×50m1本、1×20m1本、1×10m1本）設定し、黒ボク層を掘り下げローム層上部において遺構検出を行なった。その結果明確な遺構は検出されなかった。

以上の結果、当地区内における事業実施については問題無しと判断した。（後藤）

光昌寺遺跡（B地区）位置図
（地形図「犬飼」使用）

文献：後藤幹彦「光昌寺遺跡（B地区）」『大野地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』大野町教育委員会、1994　P9

156. 岩上遺跡

所在地	大野郡大野町大字矢田字岩上	**調査面積**	1,500㎡
調査原因	地域農業確立総合対策事業（天地返し工事）	**担当者**	後藤幹彦
調査期間	931208	**処置**	調査後破壊
調査主体	大野町教育委員会	**台帳番号**	545216

概要 試掘対象区は、大野町の中心部より南方にある台地上（標高約240m）に位置する、東から西方向に下降しながら伸びる畑地である。

試掘方法としては、東から西方向にトレンチを1本（1×35m）設定し、黒ボク層を掘り下げローム層上部において遺構検出を行なった。その結果明確な遺構は検出されなかった。

以上の結果、当地区内における事業実施については問題無しと判断した。（後藤）

岩上遺跡位置図
（地形図「三重町」使用）

文献：後藤幹彦「岩上遺跡」『大野地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』大野町教育委員会、1994　P10

157. 夏足原遺跡（Q地区）

所在地	大野郡大野町大字夏足字原	**調査面積**	2,000㎡
調査原因	地域農業確立総合対策事業（天地返し工事）	**担当者**	牧尾義則・後藤一重・後藤幹彦
調査期間	931209	**処置**	調査後破壊
調査主体	大野町教育委員会	**台帳番号**	545221

位置　試掘対象区は、大野町の中心部より南方にある台地上（標高約220m）に位置する、東から西方向に伸びる畑地である。

試掘方法としては、南から北方向にトレンチを2本（2×40m1本、2×20m1本）設定し、黒ボク層を掘り下げローム層上部において遺構検出を行なった。その結果明確な遺構は検出されなかった。

以上の結果、当地区内における事業実施については問題無しと判断した。　（後藤）

文献：後藤幹彦「夏足原遺跡（Q地区）」『大野地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』大野町教育委員会、1994　P11

夏足原遺跡（Q地区）位置図
（地形図「三重町」使用）

158. 上園遺跡

所在地	大野郡大野町大字杉園字その	**調査面積**	8,300㎡
調査原因	高率煙草栽培の為の土取り	**担当者**	牧尾義則・後藤幹彦
調査期間	931101～931130　940124～940308	**処置**	調査後破壊
調査主体	大野町教育委員会	**台帳番号**	545134

位置　試掘対象区は、大野町の中心部より東方にある台地上（標高約230m）に位置する、東から西方向に伸びる畑地である。

1次調査では南方方向に5本（1×60m）、2次調査では南北方向に2本、東西方向に10本のトレンチを設定し、黒ボク層を掘り下げ、ローム層上部にて遺構検出を行なった。その結果、明確な遺構は検出されなかった。

以上の結果、当調査区内においては発掘調査を必要とする遺跡は存在せず、天地返し工事の実施についても問題無しと判断した。

（後藤）

文献：後藤幹彦「上園遺跡」『大野地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』大野町教育委員会、1994　P8

上園遺跡位置図
（地形図「犬飼」使用）

159. 下野（しもの）遺跡

所在地　大野郡犬飼町大字下津尾
調査原因　国道10号線犬飼バイパス建設
調査期間　930601～940331
調査主体　犬飼町教育委員会
調査面積　約24,000㎡
担当者　中野宏一
処　置　調査後破壊
台帳番号　547034

位　置　遺跡は支流字津尾木川が大野川本流と合流する犬飼町大字下津尾字灰倉の火山性台地上標高約70m～80mに位置している。

時　期　縄文後期、縄文晩期、古墳時代前期、近世以降～江戸前・中期頃まで

まとめ　発掘に取りかかる以前は、畑地であったということでかなりの攪乱が心配されたが、土地改良等がなく旧地形をとどめていたため、調査の結果、多量の遺物とともに縄文晩期の円形住居跡や、近世以降の二重の溝状遺構と柱穴群、土壙墓がほぼ完全な形で出土した。

（中野）

文献：「下野遺跡」『国道10号線犬飼バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査概報』犬飼町教育委員会、1994

下野遺跡位置図
（地形図「犬飼」使用）

縄文時代晩期の住居跡

160. 横迫（よこさこ）遺跡

所在地 直入郡荻町大字恵良原
調査原因 福祉健康エリア整備事業
調査期間 930614～930620
調査主体 荻町教育委員会
調査面積 700㎡（本調査部分）
担当者 玉永光洋・神崎哲也
処置 一部本調査
台帳番号 548075

概要 建物部分は20m間隔で3m×60mのトレンチを南北方向に5ケ所、取り付け道路部分では道路の中央に沿って2ケ所設定し、調査を行った。その結果、遺構、遺物の出土はなかった。

しかし、屋内運動場の部分は、住居跡3基（弥生時代初め）と縄文晩期の包含層が確認されたので、その部分のみ本調査を行った。

横迫遺跡位置図
（地形図「竹田」使用）

161. 長湯北部地区（ながゆほくぶ）

所在地 直入郡直入町大字柚柑子
調査原因 県営圃場整備
調査期間 930525～930527
調査主体 大分県教育委員会
調査面積 400㎡
担当者 後藤一重
処置 予定通り工事
台帳番号 ―

概要 本年度の工事予定地は、芹川支流の河内川沿いの小谷平野で、河岸段丘の発達がみられる。

試掘調査は重機を使用し、調査対象地区のほぼ全域に2×10mほどの調査区を設定した。その後、作業員による精査を行い遺構・遺物の確認につとめた。その結果、全体にクロボクが深く、1～2mの厚い堆積がみられたが、このクロボク中から近世以降の土器片が若干出土したのみで、目だった遺構・遺物は検出されなかった。（後藤）

長湯北部地区位置図
（地形図「久住」使用）

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』2　大分県教育委員会、1994